

資料

橋本清之助遺稿

奥 健 太 郎

橋本略年譜

橋本清之助（一九八四〈明治二七〉—一九八一〈昭和五六〉）は異色の経歴を持つ人物である。小学校卒という学歴でありながら、内務官僚の田沢義鋪、後藤文夫らの知遇を得て、農相秘書官、内相秘書官を勤め、太平洋戦争中に実施された翼賛選挙においては、翼賛政治体制協議会（以下、翼協）事務局長に就任し、湯沢三千男内相とともに翼賛選挙を統括する一人となった。戦後は、日本原子力産業会議の事務局長に就任し、原子力産業界で「隠然たる力を発揮」した人物として知られる。本稿はこの橋本が残した未公開の手記を紹介するものである。以下に橋本の年譜を掲げる。

明治二七（一八九四）年 父久治郎、母たまの長男として東京府神田区東大工町に生まれる

明治三九（一九〇六）年 日本橋区十思小学校高等科中退

明治四四（一九一一）年 静岡県藤枝町私立育英中学校の助教師となる

大正二（一九一三）年 静岡民友新聞社入社

大正六（一九一七）年 時事新報社入社（横浜支局）

大正一一（一九二二）年 時事新報ドイツ特派員

大正一二（一九二三）年 時事新報社退社。新政社同人となり雑誌「新政」の編集に参加

大正一四（一九二五）年 新日本同盟に参加。『欧米都市の発達』（新政社）を刊行

昭和七（一九三二）年 後藤文夫農林大臣秘書官

昭和九（一九三四）年 後藤内務大臣秘書官

昭和一一（一九三六）年 財団法人農村更正協会常任理事

事

昭和一七（一九四二）年 翼賛政治体制協議会事務局長、

翼賛政治会事務局長

昭和一九（一九四四）年 貴族院議員に勅選

昭和二一（一九四六）年 公職追放

昭和二六（一九五二）年 公職追放解除

昭和二七（一九五二）年 財団法人日本電力経済研究所

常任理事

昭和二九（一九五四）年 財団法人日本産業開発青年協

会理事

昭和三〇（一九五五）年 原子力平和利用調査会常任理

事

昭和三一（一九五六）年 財団法人日本原子力産業会議

常任理事（兼事務局長）

昭和三五（一九六〇）年 財団法人電力経済研究所理事

長代理（三七年一月二日まで）

昭和五六（一九八一）年 逝去

まず「橋本清之助遺稿」（以下、「遺稿」と略）の概要を紹介しておこう。今回紹介する「遺稿」は、橋本が生前書き残した手記を、ご子息の橋本富之助氏がワープロに入力し、それを印字して冊子にまとめたものである。この冊子は「橋本清之助遺稿」と名づけられ、橋本清之助の一三回忌に近親者のみに配られた。「遺稿」は、昭和二七年までの半生を綴った手記（以下、手記①）、「二・二六事件」（以下、手記②）、「翼賛政治の顛末」（以下、手記③）、「連合国最高司令官に対する嘆願書」（以下、手記④）と題された四編から構成されている。本稿ではその中でも史料価値の高い①～③の手記を紹介したい。⁴

それでは橋本の生涯を「遺稿」を紹介しながらまとめておこう（以下、括弧内の引用は特に断らないかぎり「遺稿」からの引用である）。

橋本は明治二七（一八九四）年東京に生まれた。父久治郎は鉄物商を営んでいたが、生活は必ずしも豊かではなかった。青年時代の橋本は「青雲の志を海外雄飛」に求める若者であり、海外航路の船員となって渡航することを計画し

たり、あるいは東京商船学校、海軍兵学校への入学によりその夢を叶えようとした。しかし、これらの試みはいずれも失敗に終わり、「海外雄飛の夢も容易に実現難にて焦慮」する日が続いた。

東京航海学校に通うかたわら、古本の販売などをしながら生計を立てていた橋本の人生の大きな転機は、十七歳の時（明治四二（一九〇九）年）に訪れた。修養団への参加がそれである。修養団は社会教育家連沼門三を主宰者として、明治三九（一九〇六）年に結成された修養教化団体であり、社会の美化、善化を唱え、主として学校関係者の間にその組織を拡大した。橋本はその修養団草創期のメンバーの一人であり、『修養団八〇年史』にも修養団を結成したばかりの連沼が、橋本ら三名と共同生活をしたことが記されている。⁽⁵⁾

橋本は明治四四（一九一一）年、修養団の知人の紹介で静岡県藤枝町私立育英中学校の助教師の職を得た。⁽⁶⁾橋本はここで修養団の支部作り奔走し、その過程で当時静岡県安部郡長であった田沢義鋪を紹介された。田沢は後に青年運動の第一人者となり、大正一〇（一九二一）年日本青年会理事、昭和九（一九三四）年大日本連合青年団理事長などを歴任する人物である。橋本はこの時田沢に修養団支部

組織化のための援助を請い、それが橋本と田沢の「終生変わらぬ師弟愛」が結ばれる機縁となったという。⁽⁷⁾そして、この田沢との出会いが、その後橋本の人生を大きく変えることになる。

橋本が勤めた育英中学校はやがて経営難から廃校となり、橋本は銀行勤務を経た後、静岡民友新聞記者となった。新聞記者としての橋本を、田沢は後に次のように回想している。⁽⁸⁾

橋本さんは、二十歳前から新聞記者として、令名があった。私がかつて、静岡県に役人をしていたとき、静岡民友新聞に連載された「郡長論」を読んで、その堂々たる所論と、透徹せる人物評に地方の新聞にも、これほど優秀なる記者があるかと驚かされたが、その筆者が、まだ徴兵検査前の一青年記者、橋本某であると聞くにいたって、私の驚きはさらに幾倍を加えざるを得なかった。これが私の、橋本さんを知った初めである（後略）。

田沢と橋本の初めての出会いについては、両者の回想は一致していないが、おそらく田沢の記憶違いであろう。しかしいずれにしても、橋本は新聞記者として有能だったよ

うである。大正六（一九一七）年橋本は時事新報に移り、横浜支局長に就任している。また横浜支局時代には実際の政治運動にも携わった。すなわち横浜市会選挙において橋本は、「中央政党に由らざる純正市民の代表を市会に送り」こむべく運動を行い、三名の市会議員からなる中庸会を組織したが、橋本はこの中庸会の幹事役だったという。橋本はその後国政レベルにおいて、田沢らの新政運動に参加することになるが、既にこの時期にその原点があったといえるよう。

大正一二（一九二三）年、橋本は時事新報を退社した。退社の背景には、慶應出身者が時事新報の主流を占めることへの反発があったようである。⁽⁹⁾新聞記者を辞めた橋本はまもなく、田沢が主宰する新政社に参加し、雑誌『新政』の編集に携わることになった。⁽¹⁰⁾雑誌『新政』は、「党弊」に危機感を抱く田沢が、国民の政治道徳の向上、政治知識の普及を目的として刊行した雑誌である。⁽¹¹⁾この『新政』に橋本は多くの論説を発表しており、この時期の橋本の政治認識を窺い知ることができる。一例として橋本が『新政』創刊号に寄せた論説「非生活化政治の生活運動」⁽¹²⁾の内容を紹介しよう。橋本によれば、今日の日本政治の第一の問題点は、国民各階級を代表した政党が存在しないことである。

すなわち、既成政党は「資本家階級のみの利益を代表する特権意志の代表機関」に過ぎないのである。第二は、日本で政権授受が国民の意思と無関係に行われることである。これは政党が「真の階級」を代表していないからであり、橋本は国民の意思に基いて政権が移動するイギリスとの落差を強調する。こうした見地から橋本は、普通選挙制度の導入により、国民の意志が広く政治に反映されることを期待する。ただし、そこで重要なことは国民が政治に対する積極的な関心を持つことであり、そのためにも国民の政治教育が必要であると訴えている。以上の橋本の主張は、田沢の提唱する思想と親和性の高いものといえよう。なお、橋本は論説の発表だけでなく、新政社講演部長として全国各地で公演も行っており、新政社の中心人物の一人だったことが窺える。⁽¹³⁾

大正一四（一九二五）年、橋本は田沢の勧めにより、新日本同盟の一員に加わった。新日本同盟は田沢、後藤文夫、丸山鶴吉らの内務官僚を中心に結成された団体であり、国民の政治教育のみならず、現実の政治活動も視野にいれ、中立政党樹立を通じた政界革新を目的とした。⁽¹⁴⁾この同盟には近衛文麿も幹事の一人として加わっており、会員の中には近衛新党結成を企図した人物もあったといえる。⁽¹⁵⁾橋本はこ

の新日本同盟の中では、関口一郎（元二六新報記者）の下で実務を担当し、後藤文夫の伝記によれば、「新日本同盟の事実上の運営は関口と橋本の兩人がやっていた」⁽¹⁶⁾という。昭和七（一九三二）年、斎藤実内閣が成立すると、後藤は農相として入閣し、橋本は後藤により農相秘書官に起用された。その経緯は後藤の伝記に次のように記されている。⁽¹⁷⁾

後藤は斎藤内閣に農林大臣として入閣すると、橋本を秘書官に引きうけてくれと交渉した。後藤は田沢と関口には了解を求めておいたが、まったく一存で橋本を秘書官に起用することを考えたのであった。

その交渉をうけた橋本はむしろ意外に思った。というのは新日本同盟で後藤との接触は相当にあったが、そして古い交際でもなかった。まして後藤は台湾総督府の総務長官時代に内務省から連れて行った秘書が二、三いるし、その人たちこそ秘書官として適格者であると考えたからである。

しかし橋本は後藤を尊敬していたから、後藤のために一働きしてみる気になって応諾した。後藤はきわめて礼儀正しいので、外見はいかにもきちょう面に見えるが、かなりの物ぐさである。ポケットには手帳を入れている

のだが、日程などはまったく書き入れていない。周囲の者に一切まかせっきりである。（中略）橋本はこれとはまったく反対である。かなりきちょうめんな性格であり、日程や時間をくるわせるようなことはほとんどしない。仕事上では信用した人にまかせっきりにすることも多いが、自分のことは自分の手でできばき処理していく。（中略）およそ後藤と橋本では性格的に一致したところは一つもないといってよい。それどころか、まったく対照的な性格といえる。

この性格の相違こそ後藤が橋本を必要とした最大の理由で、秘書官に起用したとも考えられるし、また長い間両者の親交が続くのも、まったく対照的な性格のためであるのかも知れない。しかし何といっても新日本同盟の同志として、両者の政治感が一致していたことが、この二人を結びつけた大きな理由ではないかと思われる。

こうして橋本と後藤の親密な関係が始まり、それは生涯続くことになる。

斎藤内閣が瓦解すると、昭和九（一九三四）年岡田啓介内閣が成立した。後藤は内務大臣として入閣し、橋本も引き続き内務大臣秘書官に起用された。後藤内相時代の最大

の出来事は、二・二六事件である。手記①、手記②は、二・二六事件における後藤、橋本の行動が窺える興味深い記録である。すなわち、事件勃発当日、後藤は内相であるにもかかわらず、宮中への参内が遅れ、そのことは後々まで批判された⁽¹⁸⁾。手記には、後藤が襲撃を避けて一宮房二郎宅に逃れた後、治安維持のための指示を出しつつ広瀬文忠宅、日本青年館へと移動しているうちに、参内が遅れた事情が説明されている⁽¹⁹⁾。また、岡田首相生存の情報が、二六日の午前一〇時には福田耕首相秘書官から橋本、後藤へと比較的早い段階で伝わったこと、首相官邸から脱出した岡田を参内させるにあたり、橋本が岩佐礒郎東京憲兵司令官に協力を依頼し、それにより首相の参内が実現した事実が記されている。

岡田内閣が倒れた後、橋本は農村更正協会理事を務めながら、後藤、唐沢俊樹、丸山鶴吉らの内務官僚とともに漢学者公田連太郎から漢学の講義を受け、彼らとの交流を深めた。また昭和研究会にも後藤とともに参加し、橋本は同研究会の政治動向研究会委員、農業問題研究会委員として名を連ねているが、⁽²⁰⁾「遺稿」にはこの時の活動を窺わせる記述は見当たらない。

太平洋戦争中の昭和一七（一九四二）年、東条英機内閣

の下で第二一回総選挙、いわゆる翼賛選挙が行われた。東条内閣はこの選挙において、政府にとり好ましい候補者を議会に選出させるべく、同年二月翼協を結成し、同会に候補者推薦の役割を担わせた。

手記①、③は、翼協事務局長として翼賛選挙の中核に参画した橋本の貴重な回想である。第一に興味深いのは、候補者推薦の方法が具体化されていく過程が詳細に記されている点である。すなわち昭和一七年一月四日、橋本は湯沢内務次官から「候補者を如何にして推薦すべきかその具体方策確立に就いて意見を求められ」、⁽²¹⁾候補者推薦方法の具体案を起草することとなった。橋本は草案を後藤に見せた後、一九日湯沢に提出、その後横山助成（大政翼賛会事務総長）も協議に加わり草案に修正が施された。そして一月二四日橋本は政府関係者に計画案を説明、「大体、以上の計画案を政府も承認」したという。こうした経緯は従来よく知られていなかった翼賛選挙の重要な一面である。⁽²²⁾第二に、翼協についても興味深い記述が残されている。例えば翼協の会長が湯沢、橋本、横山三者の協議の中で決められたこと、翼協の決定した基本方針が「殆ど余の手許に於いて予め用意したる各案」であったことなどは、翼協の性格を理解する上で重要な記述であろう。⁽²³⁾

翼賛選挙が終了すると、政府は政府と議会の一体化を図り、翼賛政治会を結成した。橋本は翼協に引き続き翼賛政治会の事務局長に就任している。「遺稿」によれば、翼賛政治会の重要政策の決定は、前田米蔵、大塚唯男と「総裁を代理して議に与か」つた橋本の三者会談で決定されたという。しかし、残念ながらその具体的内容はほとんど触れられていない。

昭和一九（一九四四）年、橋本は貴族院議員に勅選された。これは、橋本が翼賛政治会の幹事役にもかかわらず、帝国議会に議席がないのは不自由であろうという配慮からなされたものであったという。⁽²⁴⁾

終戦後の昭和二一（一九四六）年、橋本は公職を追放された。追放を解除されたのは昭和二六（一九五一）年のことである。追放解除まもなく橋本は、日本発送電総裁の小坂順造の推挙により、財団法人日本電力経済研究所常任理事に就任した。ここから橋本の電力事業、とりわけ原子力産業とのかかわりが始まる。電力経済研究所は昭和二九（二九五四）年、「原子力の産業利用に関する建議書」を政府に提出し、昭和三〇（一九五五）年には原子力平和利用調査会を発足させている。⁽²⁵⁾そして昭和和三一（一九五六）年、民間の原子力調査機関を統合して財団法人日本原子力

産業会議が発足すると、橋本は同会議の常任理事兼事務局長に就任した。⁽²⁶⁾橋本はそれ以後も原子力関係の団体の役職を歴任し、原子力産業界に大きな足跡を残した。

昭和四八（一九七三）年、原子力産業会議の第一線から退いた橋本は、以後晴耕雨読の生活を送り、昭和五六（一九八一）年死去した。享年八七歳。

以上を踏まえた上で、この「遺稿」の史料価値をまとめておきたい。第一は、橋本の半生を詳細に跡づけることができることである。橋本は政界の表舞台ではなく秘書官、事務局長といった裏舞台で活躍した人物である。したがって、伝記はもちろん評伝の類も残されておらず、詳しい経歴もあまり知られていなかった。この手記からは、橋本の生まれ育った環境、思想の形成過程、いわゆる非「エリート」の橋本が政界中枢部に接近していく過程とその背景となる人脈を読み取ることができよう。第二に、既述のように、この手記は裏方から見た二・二六事件、翼賛選挙の姿が詳細に記録されている。特に後者は、翼賛選挙の知られる側面を浮き彫りにする貴重な回想録といえよう。

最後に橋本の関連資料についてもここで紹介しておこう。

橋本には伝記はないが、自叙伝に準じるものが存在する。

『電気新聞』（昭和五年六月二日～七月三〇日）に掲載された「雑草の生きた道」（計二二回）がそれである。この自叙伝と「遺稿」で重複する記述はあるが、総じて「遺稿」の方が具体的に詳細な記述となっている。なお、この「雑草の生きた道」は、青水会（戦前橋本が作った「青水荘」という道場で共同生活を送っていた人々により結成された会）により一冊の本としてまとめられた。『雑草の生きた道』（青水会発行、昭和五六年）と名づけられたこの本が、どの程度頒布されたか不明である。同書は電気新聞掲載の「雑草の生きた道」に、青水会メンバーの寄稿文が付け加えられている。

インタビュの類としては、第一に『橋本清之助氏談話速記録』（内政史研究会、昭和三九年）があり、主として新日本同盟、田沢義鋪、新官僚について語られている。第二は、内務省史編纂の際に行われたインタビュ記録、『橋本清之助氏座談会速記録』（国立国会図書館憲政資料室寄託『大震会所蔵内政関係談話速記録』）である。ここでは、翼賛選挙における橋本の役割が述べられており、手記③「翼賛政治の顛末」と内容が重複する部分も少なくない。橋本の著書には、欧米都市発達の跡をまとめた『欧米都市

の発達』（新政社、大正一四年）、橋本の思索を綴った『現代文明縁起』（日本原子力産業会議、昭和五七年）がある。また、亡妻の闘病記録を記した『断絃の記』（非売品）という小冊子もある。これらの関連資料と今回の手記を重ね合わせて読めば、橋本の人物像をより深く理解することができよう。

なお、資料の紹介にあたっては、ワープロで印字された「遺稿」の記述をそのまま転載し、誤字（あるいは誤入力）と思われる箇所は（一）で補った⁽²⁷⁾。また、プライバシーに関わる記述について一部これを削除した。

（１） 田原総一郎氏は、原子力発電をめぐる官と民の主導権争いを描いた『生存への契約―誰がエネルギーを制するか―』（文藝春秋、一九八一年）の中で、橋本を「日本原子力界の陰のプロデューサーとして隠然たる力を発揮しつづけてきた」と紹介している（一二頁）。

（２） 年譜作成にあたっては、橋本清之助『現代文明縁起』（日本原子力産業会議、昭和五七年）掲載の年譜を参照した。

（３） 手記④は大部分が、森有義『青年と歩む後藤文夫』（日本青年館、昭和五四年）二六九―二七〇頁、に引用されているので、本稿では紹介しない。

- (4) この「遺稿」の原稿は現在、遺族のところにも見当たらず、残されているのは富之助氏か入力したデータと冊子だけであるという。また「遺稿」は手帳あるいは日記を基に記した形跡があるが、それも遺族のところには見当たらないという。
- (5) 『修養団八〇年史 概史』（修養団、昭和六〇年）、六九頁。
- (6) 橋本清之助「雑草の生きた道（一）」（『電気新聞』、昭和五一年六月二一日）。
- (7) 森有義「青年と歩む後藤文夫」（日本青年館、昭和五四年）。
- (8) 後藤文夫編『田沢義鋪選集』（田沢義鋪記念会、昭和四二年）、三九三頁。
- (9) 橋本は人事異動の際、編集局長から「ここは慶応出てなければ主流にならないヨ」と言われ、「即座に辞表を出した」という（橋本清之助「雑草の生きた道（一）」、『電気新聞』、昭和五一年六月二三日）。
- (10) 田沢の一九二〇年代から三〇年代にかけての政界革新論、革新運動については、金宗植「一九二〇年代内務官僚の政界革新論―田沢義鋪の地方自治論―」（『史学雑誌』、二〇〇二年二月）に詳しい。
- (11) 『新政』創刊の趣旨は、田沢義鋪「新政の発刊に際して」（『新政』、大正一三年一月）参照。
- (12) 橋本清之助「非生活化政治の生活運動」（『新政』、大正一三年一月）。
- (13) 新政社主催政治教育講習会の案内記事（『新政』、昭和二年六月号）。
- (14) 前掲、金「一九二〇年代内務官僚の政界革新論」。
- (15) 橋本によれば、「近衛さんを一つの中心として、新しい政党を作らにやいかん」という気持ちの一部の人にもあったという（伊藤隆『昭和初期政治史研究』（東京大学出版会、昭和四四年）、五七頁）。
- (16) 前掲、『青年と歩む後藤文夫』、一〇六頁。
- (17) 同右、一〇七一―一〇九頁。
- (18) 例えば、当時首相秘書官であった迫水久常は、「午後四時すぎ、そろそろくらくなるころ、筆頭閣僚たる後藤内相が参内して、正式に閣議が開かれた。閣僚の間には内相の参内の遅延をせめる声がかかれた」と回想する（迫水久常『機関銃下の首相官邸』（恒文社、昭和三九年）、三九頁）。
- (19) 前掲、『青年と歩む後藤文夫』もその事情に言及しているが、橋本の手記の方が具体的である。なお、この二つを照合させると、後藤の伝記編纂者は橋本の手記を基礎に、二・二六事件当時の後藤について記述していることが窺える。
- (20) 「常任委員・委員・各部研究会委員名簿（昭和一四年

二月現在」(昭和同人会編『昭和研究会』、経済往来社、昭和四三年)。

(21) もっとも湯沢が橋本に意見を求める前に、推薦団体を
用いた選挙という大枠は既に決まっていたと考えられる。

この点については、拙稿「翼賛選挙と翼賛政治体制協議会
―その組織と活動」(寺崎修、玉井清編『戦前日本の政治
と市民意識』、慶應義塾大学出版会、平成一七年、所収)
を参照のこと。

(22) この点に最初に言及した研究に、菅原和子「翼賛選挙
における『新党運動』―その歴史的経緯と実際」(『法学新
報』、平成二二年二月)がある。

(23) 翼協の事務局の様子については、翼協事務局に勤務し
た大室政右氏の『翼賛選挙 翼賛政治体制協議会裏方の記
録』(緑蔭書房、二〇〇四年)、『大室政右 オーラルヒス
トリー』(政策研究大学院大学〈政策研究院〉C.O.P.オー
ラル・政策研究プロジェクト、二〇〇四年)に詳細な回想
がある。

(24) 橋本清之助「雑草の生きた道(七)」(『電気新聞』、昭
和五一年七月一日)。

(25) 電力経済研究所、日本原子力産業会議発足の経緯は、
橋本の手記の他、森一久編『原子力は、いま―日本の平和
利用三〇年―』(日本原子力産業会議、一九八六年)を参
照した。

(26) 日本原子力産業会議は、原子力の平和利用のための調
査活動、原子力についての啓蒙活動などを行い、日本の原
子力産業史に大きな足跡を残した団体である。「遺稿」は、
日本原子力産業会議で活躍した時代には言及していないが、
前掲、橋本「雑草の生きた道」はその時期を中心に回想し
ている。

(27) ただし、一部の人名については、一般的な表記に改め
た(例、「近衛」↓「近衛」)。

追記 ここで紹介した「遺稿」は、橋本久道氏に提供してい
ただいたものである。資料の紹介を承諾していただいた橋
本氏に、この場を借りてお礼申し上げたい。

「明治二十七年（一才）より

昭和二十六年（五十八才）まで」（手記①）

明治二十七年（一八九四年） 一才

二月九日、東京市神田区東大工町に生まる。父久治郎

二十九才 大阪市南区内安堂寺町 橋本久兵衛長男、母た

ま 十七才 東京市岩本町 渡辺嘉七次女。東大工町は現

在の国電神田駅西北付近。

大阪橋本家は、久兵衛の父清兵衛の時より心斉橋油問屋小倉屋の番頭支配人を勤め、後、暖簾を分けられ小倉屋を称す。現に菩提寺大阪市南区谷町九丁目藤次寺の墓に小倉屋清兵衛とあり。清兵衛の先は不詳。

父久治郎は二十才頃、家を長姉婿大森新助に譲り、次姉夫婦川長長兵衛を頼り東京に出て、古鉄問屋市川巳之松（神田区紺屋町）方に寄り小僧として古鉄類の回収に従事し、巳之松夫婦の信用を得、且つ商売熱心を買われ数年にして番頭となり、更に一家独立を許され又その媒酌によって前記渡辺嘉七の次女たまと結婚す。即ち前記東大工町の裏店に世帯を持つ。

渡辺嘉七は伊勢桑名（三重県桑名市）の出身にして、當時岩本町にて土地家屋の周旋保険代理店の如きを営み町内

にては中産以上の生活をして居たり。

この年八月一日、日本は清国（今の中国）に対して宣戦布告し、所謂日清戦争開始さる。九月黄海海戦に勝ち十一月旅順口を占領す。明治文化の勃興期にある一面漸く軍国主義の風潮おこる。

明治二十八年（一八九五年） 二才

四月十七日、日清戦争終結。講和条約調印す。三国（仏、独、露）干渉による遼東半島返還の已むなきに至り、国論沸騰す。臥薪嘗胆してこの恥辱をそぐべしと云う硬論起る。

明治二十九年（一八九六年） 三才

父久治郎の一家独立後、東大工町より母方の渡辺家付近、即ち岩本町の裏店に移転。弟政治郎生る。

明治三十年（一八九七年） 四才

妹 花子生る。

明治三十一年（一八九八年） 五才

父久治郎の永年の宿望として自ら店舗を持つて古鉄商を

営まんと云うことであり、この年漸く神田東福町の間口三間、奥行十数間の家を借用することを得。移転と同時に従来の古鉄の回収より脱して古鉄店として営業を始む。

三国干涉の独逸は支那膠州湾を租借、露西亞、同じく旅順大連を租借、フランスは同じく広州を占領し三国の支那に対する野望露骨となる。日本の国論いよいよ対外硬となる。

明治三十二年（一八九九年） 六才

東福田町に学習塾あり、始めて書・算を習う。昔は書道を手習いと云い半紙一帖を綴じて真つ黒になるまで書字す。算は珠算なり。

明治三十三年（一九〇〇年） 七才

学齢に達し日本橋区十恩^{ニシ}尋常高等小学校に入学す。学校は旧伝馬町牢屋の跡、福田町よりは日陰橋を隔てて指呼の間にあり、日本橋区住民（正久と云う刃物屋）の知り合いに寄留して入学許可を得たり、今日に云う越境入学なれど当時はやかましからず。尋常科四年、高等科四年にして八年制なり。

清国に義和団事件起こる。日本を含む各国連合軍北京攻

略し日本再び軍国気分漲る。

明治三十四年（一九〇一年） 八才

尋常二年 この頃、父の家業はガス会社の古鉄管の払い下げを受けるための保証金、資金等にて可なり苦勞した模様にて、多く市川巳之松、渡辺嘉七等より借入れ、競争入札の時など同業者などの寄り合いにて数日間父の帰宅なかりしこと等子供心にも記憶す。

明治三十五年（一九〇二年） 九才

尋常三年 父は相当の計画家にて時代の趨勢をよく見てあれこれと将来計画をたて第一念願たる古鉄商の店舗を開き営業も順調に進みたるも古鉄商の専門店に転向せんと借金して神田岩本町に移転す。新店は左衛門橋より今川橋に通ずる改正道路に面し間口四間、奥行十間、裏に空き地あり、借家なれども堂々たる店なり。古鉄管を担ぎ或いは荷車に載せて曳く、子供としては可なりの重労働なり。

明治三十六年（一九〇三年） 十才

尋常四年 妹久子生まる。
世の軍国調と武勇高揚の氣風に影響され、いつとなく、

暇を見ては講談本を読む様になり、貸本屋より英雄、豪傑、俠客伝を借りて読み耽る。一週間二銭の借賃なり。前年、露西亞はシベリア鉄道を開通せしめ東方侵略の体勢を固む。対露外交強硬の国論高く、漸次日露国交の雲行き急迫す。

明治三十七年（一九〇四年） 十一才

高等一年 弟達三生まる。

時勢急迫し日露終に国交を断絶し、二月十日宣戦布告となる。それに先立ち八日、仁川（朝鮮）沖及び旅順口にて露西亞艦隊を攻撃す。日本としては前にはアジアの一大帝国清国に勝ちたるも、この度はヨーロッパの先進国たる露西亞を相手として開戦したれば朝野を挙げて戦争遂行に集結す。旅順攻略、遼陽攻撃等、その都度、提灯行列が行わる。幾度か学校も旗行列を催し戦勝を祝う。

明治三十八年（一九〇五年） 十二才

高等二年三月の奉天占領、五月の日本海々戦は日露の勝敗を決定的なものとし、六月米大統領の講和斡旋により、八月米ボーツマスに於いて講和会議。政府の講和条件を不満とする国論は鼎の沸く如くついに東京市内に焼打事件となる。警察署、交番、市街電車等焼かる。当時の光景未だ

に忘れず。

世界の二大帝国に戦勝し軍国調世を風靡す。戦後、冒險世界、武俠世界等の少年雑誌流行し、これを耽読したものなり。特に青雲の志を海外雄飛に求めると云うことが当時少年の夢であり、自分もこの頃より何とかしてアメリカに渡り苦学力行するか、然らざれば海軍々人か、高級船員として七つの海を舞台として男らしい出世をしたいと日夜夢想する様になる。

父の野心的な家業は一步一步発展しつつあったが、何分にも不相応に無理な借金をしているため日に債鬼の責むるところとなり、生活は益々困窮し一日も安じて居ることが出来ず、子供心に商売と云うものにツクツク嫌悪する様になり、自分だけは両親の喜ぶ様な立派な出世したしと云う念願を持てり。

明治三十九年（一九〇六年） 十三才

高等三年 父は余を家業を継がしむる意のため、学校より帰れば店の小僧同様に厳しく躰けいささかも仮借するところなく、一方、余は益々海外熱にうかされ米国航路の下級船員となり渡航せんことを密かに企てる様になり、下級船員募集の新聞広告などを見てはそれとなく密かに調べ、

ついに意を決して十一月のある日、朝登校する振りをして家出した。

所持金は五円と若干の手回品を学校鞆に入れ、鉄道馬車にて品川まで行き午前十時頃発の神戸行に乗り。東京を離れる時には、さすがに残る母のことを思い断腸の念にたえず、涙ふき家の方に手を合わせり。

汽車に乗りし時は、神戸に行き下級船員周旋屋を頼らんとのもりなりしも、次第に東海道を西行夜になるにつれ、一層子供心に心細くなり翌朝六時、大阪駅に着き、ついに親戚福永こう（旧川長、父の姉）方に寄る。大阪―東京間の電信交渉あり、翌々日、父来阪し、東京に連れ帰らる。

明治四十年（一九〇七年） 十四才

高等三年退学 東京航海学校二年入学

海外渡航の企画に失敗したるも再度機会をねらい居るうちに、この度は同級生浅野朝吉（級長）渡辺初太郎（副級長）と語らい横浜より米国行き商船にて密航せんと云う計画を樹て、ある日三人とも旅支度を整え予てしめし合わせた集合場に至りしところ、平素より余の挙動を注意しいたる母が追跡、難なく三人とも発見され、それぞれ親許に引き取られ又々失敗す。

さすがに父も余の頑強な行動に折れ、親類会議の後、家は弟に継がしめることとなり、漸く月島の私立東京航海学校二年に入学することを許されたり。同校は公立東京商船学校及び江田島海軍兵学校の予備学校の如きものなり。入学とともに月島の同校寄宿舎に入る。前記浅野はその後長じて旅館業を営み関東大震災で死し、渡辺は映画説明者となり谷天朗と称す。

明治四十一年（一九〇八年） 十五才

東京航海学校三年 父は余の志望を許す際、一切学資は自給すべしと云う厳命ありしも母が当分、寄宿代その他を面倒見てくれることとし、日曜日毎に帰宅し学資を少額づつ渡されたるも、当時家計はすこぶる困難にて母の窮状を見るに忍びずついに自活を決意す。たまたま学校は経営難にて月島の広大な地を売払い、神田三崎町の仮小屋に移転す。余は千駄ヶ谷又は四谷に間借りし自炊し昼は学校に行き、夜は四谷大通りに古本を売り自給自足することとなる。

明治四十二年（一九〇九年） 十六才

東京航海学校四年 卒業を待たず一年早く東京商船学校、海軍兵学校を受験したるも、いづれも第一次試験を通りな

がら失敗す。一方、夜店古本屋は、浅草の間屋に荷車を曳いて仕入に行くことが重労働であり、古雑誌古本を売っても毎夜売上は知れたものにて、生活が益々困難となり、学校の方も仲々両立せず、海外渡航の夢も容易に実現難にて焦慮す。

明治四十三年（一九一〇年）

十七才

修養団寄寓。独学。

十^思恩小学校在学中、体操教師林平馬氏の知遇を得、その紹介にて修養団主幹蓮沼門三氏に知られ、修養団創設當時から神田飯田町の本部に出入りする様になり、社会教育、政治教育の意義を知る様になる。一方、将来の方向について何となく疑問を持つ様になる。一日、鎌倉の東慶寺に當時有名な釋宗演老師を訪ね教えを乞いに行く、勿論紹介無く突然伺ったのであるが快く相見を許され一時間許りお話を聞き僧堂で雲水と一緒に昼飯をよばれて帰る。

修養団が四谷左門町に移転する様になった機会にその仕事を手伝うこととなる。これがため自炊自活の困難はなくなる。その後、東京航海学校もついに廃校閉鎖したため、専ら独学となる。この暮、静岡県志田郡藤枝町の私立育英学校の教員として就職す。父母の許しを得、父から古びた

れどグレーの三揃い背広洋服を貰い柳行李を提げて赴任、同校は五年の中学課程を三年にて教授する速成中学にして元旧幕の儒臣永井東陵翁の私塾を新制学校に昇格したものなり。赴任後二ヶ月許りにて文部大臣岡田良平の教員辞令を貰えり。

静岡行きについては、余の友人和田亘の父静岡市北安東小学校長和田栄橘氏の紹介なり。担任は数学算術、代数、幾何、三角とのことにて月給は六円なり。小さな寄宿舎あり、寄宿料四円を払い二円の小遣いにて貧乏書生が一跳して月給取りに出世す。生徒は全校二百人位なり。

明治四十四年（一九一一年）

十八才

藤枝町育英学校教員

校長永井俊氏は別に駿陽女学校を経営し居れど、数十人の生徒にて殆ど私塾同様、ここの数学教員を兼務す。無給なり。育英学校に於ける担任の数学は少々得意なりしも三角等難しき問題等は閉口、但し毎晩深夜まで一生懸命に勉強したり。

この在校生に余の赴任の時には既に中退したる岡野繁蔵君と知り合う、同君は藤枝運送店に勤務し青年団の幹部なり。初めて修養団の話をしお互いに意気投合す。修養団支

部設立について静岡県学務部長船橋雅一氏を訪ね助力を乞う。船橋氏の紹介にて初めて安部郡長田沢義鋪氏と相知り、修養団の指導を乞う。岡野君と修養団藤枝支部を設立し太田黒重五郎氏を迎えて講演会を開き、次いで島田町に於いて渋沢栄一男爵、蓮沼門三先生を迎えて発会式を行う。

明治四十五年（一九一二年） 十九才

（大正元年）

十二月十三日 母たま 死す。

藤枝育英学校教員より第一銀行大阪支店員となる。

育英学校も余の赴任後、経営困難となる。生徒募集のため教員が手分けして付近各町村の小学校卒業生の家に入学勧誘に廻りしも甲斐なく終に廃校となる。

渋沢男爵の紹介にて第一銀行大阪支店に勤務することとなる。同行の計算掛りにて毎日の伝票を算珠す。月給十八円を給せられる。往年家出したる時、世話になりし福永方より通勤す。

この年、七月三十日、明治天皇崩御。大正と改元。

十二月、母急死の報にて帰京す。父の家業は神田岩本町より日本橋亀井町に移転して以来、次第に繁盛し生活も安定に向かいこれからと云う時、長年の苦勞が累積して心臓

を患う様になり、死去前、平素信心する浅草観世音に日参し一週間の願をかけ終に八日目に逝く。（爾来、余は母の遺志を継いで毎月十八日浅草観音参詣することにせり。）弟政治郎は父の業を助け、母亡き後の弟妹を世話することとなる。

大正二年（一九一三年） 二十才

第一銀行大阪支店員を辞し、静岡民友新聞記者となる。

前年末、銀行支店内に費い込み事件起こり副支配人等逮捕さる。終日珠算の機械となり、人間性を無視した生活に嫌気が差し、この機会に退職す。

静岡の前記和田栄橘氏の紹介にて静岡民友新聞社へ入社し、県政記者となる。月給十八円。市外長田村の曹洞宗徳願寺に下宿し新聞社まで約四キロを毎日、山上より通勤す。この頃、ニイチエ、ロマンローランのものを耽読、特にトルストイに心酔し屢々新聞に記事を書ける。県政記者として当時の知事湯浅倉平氏の知遇を得。

民友新聞社の政治部に春名成章（後に衆議院議員、文部政務次官）伊東圭一郎（後に朝日新聞社重役）広瀬修造（後に静岡市会議長）あり、爾来親交を結ぶ。（三君とも戦後故人となる）

大正三年（一九一四年） 二十一才

静岡民友新聞記者より徴兵。

この年七月二十八日、第一次世界大戦勃発、日本は聯合国側と共に対独宣戦布告、八月独逸の支那根拠地膠州湾を封鎖し、ヤルット島南洋諸島の独逸領を占領、更に青島（支那における独逸根拠地）を占領す。

七月、徴兵検査、甲種合格。十二月一日、千葉四街道、第一師団野砲兵第十八聯隊入隊、野砲兵二等卒となる。入隊に先立ち、静岡より十一月二十九日帰京。

大正四年（一九一五年） 二十二才

陸軍砲兵二等卒

第一次世界大戦中と雖も戦火は遙か欧州にあり僅かに支那海、南洋において海軍の対独潜水艦戦あり、陸軍は極めて一部の動員あるのみ、されど流石に戦時中なれば軍隊教育は平素より一層厳しき訓練を課せらる。

この年、父は業務を古鉄管より新鉄管、機械類にし、長年の宿望たる日本橋大門通（鉄問屋の並ぶところ）の小伝馬上町に移す。

岡野繁蔵君南洋ジャワに渡航せんとて四街道に來たり別れを告げる。

大正五年（一九一六年） 二十三才

砲兵上等兵、朝鮮派遣、帰休

六月、衆議院二ヶ師団増設を可決、陸軍は朝鮮に二ヶ師団増設を決定。野砲兵第十八聯隊も派遣一個大隊を編成す。即ち派遣大隊に編入され、上等兵に昇任、新設第二十五師団朝鮮羅南野砲聯隊出向を命ぜられ、九月、千葉四街道を出発、神戸より海路朝鮮清津港に到着、十月羅南聯隊に入隊す。幾許もなく勤務良好をもつて伍長に昇任し帰休を命ぜられる。十二月一日、羅南にて除隊、即日、日本内地に帰還のため清津を出航、三日神戸に着き、翌日、東京日本橋小伝馬上町の実家に帰宅。

大正六年（一九一七年） 二十四才

時事新報記者、横浜支局主任

除隊後、静岡市外徳願寺に再び帰る。静岡民友新聞社の旧友はいずれも他社に転職、即ち伊東圭一郎は朝日新聞社に、春名成章は時事新報社に、広瀬修造は時事新報静岡支局主任となる。

この年、寺内正毅内閣に対し衆議院は、国民党憲政会の共同政府不信任案提出、議会解散となり、四月総選挙、静岡民友新聞社社長松島廉作氏の依頼にて憲政会候補者鈴木富士弥の応援弁士として初めて県下を演説。

この夏、春名成章君の推輓により時事新報横浜支局主任の職を得。春名君は同地方部横浜編輯主任の地位にあり、地方部長熊崎健一郎氏の下にあった。余は徳願寺を辞し一旦帰京、バスケット一個を携え横浜へ赴任す。当時、支社は横浜市中区相生町六丁目にあり、支局は経済部、政治社会部に分かれ、余はその後者の主任にして県市政係に三浦某、金井某、社会係に前田某の三人の部下あり。前田は後の俳人前田普羅たり。

横浜支局の重要な任務は生糸取引所を中心とする生糸貿易と欧米各国より入国する貨客船の乗客中、知名なる人物の取材なり。後者の特に重大なニュース性あるものは本社々会部より菊池寛、佐佐木茂索等が直接来横して取材せり、生糸は当時日本輸出の大宗にして日々の相場は横浜生糸取引所にて行わる。生糸の景気は直ちに日本の経済界の消長に関連し、特に農村経済とは密着す。当初この方の主任は本社経済部の岡田魁介君主任たり。

横浜は漁村横浜村が開港して五十年、人口既に五十万を

超え神戸に優位し日本の海外貿易の玄関として活発な経済活動をす。余は横浜赴任の夜、大神宮山に上り遙かに全横浜の夜景を展望し、他日この横浜市の市長とならば、いかに許りか男子の本懐ならんと神前に暫く祈願したり。

大正七年（一九一八年） 二十五才

時事新報横浜支局主任

横浜の新聞界は各社の競争激甚にして、特に社会記事、所謂警察取材に就いてはいずれも有能な記者を配してお互いにスクープし合う状況なり、当時、時事新報は朝日、毎日を凌駕する大新聞なりしを以て、その面目にかけても他社に遅れをとることを許さず、日夜その心労少なからず、特に毎日の支局長安藤古泉君は既に五十路に近き新聞界の先輩にして彼の老練なる手腕には紙上幾たびか苦杯を嘗めたり。従って、唯一のライバルとして余は毎日を好敵手とす。

この年、八月富山県に米騒動起こり、全国に波及す。米価の高騰に伴い、諸物価の値上がり世相騒然たり。九月、ついに藩閥内閣たる寺内正毅（陸軍大将）内閣倒れ、初めて政党内閣として政友会原敬内閣成立す。

大正八年（一九一九年） 二十六才

時事新報横浜支局長

この年、経済主任岡田勉介君東京本社に転じ支局の全責任は余の双肩にかかる。

一日、中小路農相の西下を横浜より小田原の間の列車中訪い、生糸対策に就いて所見を問い、これを車中談として本社へ通信す、翌日これが掲載されるや生糸一挙に暴落し、その反響の甚だしきに喫驚したり。

横浜市政界は地主派の政友会と実業派の憲政会とは事々に相衝突し、市長安藤謙介氏は外交出身にして都市行政については全く無策。偶、市宮瓦斯局内に疑獄事件起こり局長、政友会所属の市参事会員相ついで逮捕せらる。この事件は他紙を抜いてわが時事新報のスクープにて、ライバルの毎日をして周章せしむ。

社会運動頻りに起こり普選運動盛んになる。余のトルストイ崇拜は愈熱を加え論叢小説を余すところなく読破す。河上肇氏の「社会問題研究」創刊、毎月号を愛読す。

九月、横浜財界諸団体の発起にて支那満州の経済事情を調べるため視察調査団を送ることとなり、余一人新聞界を代表してこれに加わり約一ヶ月、上海、南京、青島、天津、北京、大連、奉天を巡り大いに見聞を広む。

大正九年（一九二〇年） 二十七才

時事新報横浜支局長

横浜市は疑獄事件相ついで起こり兩派紛糾市政混沌たり、横浜開港以来の功労者にして財界の重鎮たる人々は政界の表面より隠れ、漸く二世の進出する時機になり、代議士赤尾彦作（政）戸井嘉作（憲）によって代表せられる時代は過ぎ新空氣抬頭の氣運を促す。中でも渡辺銀行の渡辺利二郎氏最も囑望せらる。この空氣の中に川本勇次郎氏、佐伯藤之助氏、相謀り中央政党内に由らざる純正市民の代表を市会に送り市政刷新を行わんと云う、余その謀議に与り事実上影の幹事長となる。中正なるべき報道任務の新聞記者にして實際行動に参画することの不可を知りつつ、なお當時は少壯氣鋭に駆られて常軌を逸脱す。幾何もなく行われたる市議会选择に、我等同志は中庸会を組織し、あらゆる兩政党の妨害を排して三人（椎野、田辺、海老塚）の新議員を出す。偶、兩党殆ど同数にて三人の中庸会はついにキャスティングボートを握る。同会のメンバーは渡辺氏を会長として川本、佐伯の外、椎野郁（弁護士）、栗原清一（医師）、海老塚肅（元東京市交通課長）、倉田猛郎（造船所社長）、田辺徳五郎（田辺合名会社社長）の十人に過ぎず。

これがため新市議会役員選挙は紛糾し、結局、井上孝哉知事の斡旋調停にて田辺を副議長とす。爾来、中庸会三人の議員によりて政党側の横車を屢牽制することあり。

この年、三月財界恐慌、各市場暴落、特に横浜の生命たる生糸相場暗澹たり、ために政府は帝国蚕糸会社を設立して蚕糸業救済に乗り出す。

大正十年（一九二一年） 二十八才

時事新報横浜支局長

横浜市政界肅正を掲げる中庸会の事務所を桜木町駅前石炭協会ビルに設け市政問題の研究會、講演會を開く。この間、椎野郁、栗原清一と親交す。椎野は国府津東華軒の息子、横浜屈指の料亭千登世の女婿、栗原は開港以来の名門野毛の栗原薬店の息子、いづれも大正初年の帝大出身の弁護士と医学博士、余より十数歳年長。

この年、中央の政情騒然、三月皇太子裕仁、渡欧のため横浜出帆。時事新報社より後藤武男君随行す。後藤君は修養団にての知己なり。十一月原首相暗殺さる。代わって高橋是清内閣成立。

大正十一年（一九二二年） 二十九才

時事新報横浜支局長

結婚

欧米出張

この年四月、新潟市本町九番浅川富治末妹良子二十三才と結婚す。椎野郁夫妻の媒酌なり。横浜住吉町に早野連之助と云う草分け齒科医あり、横浜齒科医師會長を長年勤め名望あり。早野夫人は浅川家の一族にて、夫君は椎野家と先考来親交あり、かくして余と良子との結縁の勞をとる。

浅川の先考即ち良子の父は新潟市に於ける素封家物商を手広く営む。一兄の外姉四人、兄富治が家督を継ぎ、姉は分家、又は他に嫁す。兄の代に至り家産漸く傾く。しかも結婚式は新潟市にて余に身分不相応な披露宴あり、余の父及び親戚代表列席す。良子のため先考の遺したる金十五万円持参の話、椎野媒酌人より伝えらる。これを謝辞し良子に次の三ヶ条を約束せしむ。(一) 褒貶に迷わず (二) 貧窮は共に耐うべし (三) 余の生涯に於ける仕事に一切口出しせざること。新居を横浜小港に定む。

結婚話はこの年新春にあり。その前後に余と椎野との間に外遊の計画あり、欧米の都市行政並びに今後の都市計画に就いて視察調査する目的なり。されば結婚は出発前にとり行うこととし、草々の間に挙行さる。即ち良子と新居を

定むると共に出発の準備をし、五月椎野と共に神戸港より箱根丸に乗船し渡欧の途につく。良子は新潟の実家に預く。

出航以来、上海、香港、シンガポール、カルカッタ、インド洋を経てスエズにいたる。フランス マルセーユ港に上陸したるは実に四十五日目なり。パリに約一ヶ月滞在、鐵路ベルリンに赴く。途中、深夜ケルンにて乗り換えの際、スリのためにパスポート、銀行信用状を盗まる。ベルリンにてパスポートは再発行され、信用状の損失を防ぐ、予め用心のため百ポンド札を一枚靴の底に入れ置きたるため甚だしき実害はなし、後日盗まれたるパスポートは日本へ送り届けらる。

ベルリンは南部シェーネベルグの鉄道職員のアパート二室を借る。椎野君は都中心部に住む。当時ドイツは第一次大戦後空前のインフレーションにて1ポンド（日本円換算10円）は10万マルク、翌年、帰国の際は1兆マルクまで下落したり。朝のマルクは夕に紙屑同様の価値になるため、毎日必要の分だけ換えざるを得ず、不便この上なし。従つてドイツ国の生活は窮迫のどん底にて前年来ヒットラーのナチス党盛んにデモる。十月にはイタリアのファシスト党ムッソリーニに率いられてローマに進軍す。

日本にては六月、高橋内閣に代わつて加藤友三郎内閣成

立。野党の普選運動益々盛んとなる。

大正十二年（一九二三年） 三十才

時事新報横浜支局長

欧米出張

富之助生まる

関東大震災

田沢義鋪先生の新政社に参画

新年をベルリンに迎う。ドイツの賠償不履行を理由に一月早々フランス、ヘルギー軍突如としてドイツルール地方を占領し、国内震駭す。直ちにベルリンよりフランスの占領中心部エッセン市に行き視察記事を時事新報に送る。二月末、椎野君と別れて単身ロンドンに向かう。椎野君はなお残りて勉強したしと云う。余のベルリンの滞在約半年にしてドイツ国内はハンブルグその他を視察す。途中ベルギーのブラッセルにて二日を費し、カレーよりドーバーに渡る。

ロンドンでは名物の霧と寒さに閉口す。ホテルは高賃のため到着の日一泊、直ちにロンドンタイムスの広告によつて貸し部屋を求む。部屋のガストロープは一々銅貨を入れて焚くのを珍しく思えり。滞在約一ヶ月、バーミンガム、マ

ンチエスター、ケンブリッジ等に旅行し、三月末リバプールよりキューナード会社の巨大客船に乗り大西洋を渡る。途中大暴風に遭い食堂に出ざること二日、漸く六日目にアメリカニューヨークに到着す。摩天楼の林立する大ニューヨークの景観に驚嘆す。

既に旅費も残少なくなりたればキリスト教青年会を頼り、その斡旋にてウエストサイドの余り立派ならざる裏街の下宿に投じ日々市内を視察す。滞在一週間、更にフィラデルフィヤ、ワシントンを訪い、ニューヨークより鐵路シカゴに向かう。シカゴは三日間、同市のキリスト教青年館宿舎に泊まる。市内施設を見物、再び鐵路にてアメリカを横断、シャトル市に着き、愈帰国の船に乗ることとなる。

出発前、椎野夫人より夫君の同行を懇々依頼されたれば、单身帰る訳にいかず、ロンドン、ニューヨーク、ベルリンへ再三手紙電報にて帰国を促す。己むなくば彼の来着迄、シャトル出発を延期せざるを得ざるかと心配したるに、出帆当日の朝、漸く到着す。ベルリンより直行し来たため途中いづこも見物せずと云う。俱に日本郵船に乗り途中十四日間、五月上旬揃って横浜へ帰着す。

良子新潟市にて待つ。支局にて当座の処理を終え新潟へ赴く。この月二十五日、良子富之助を生む。よって暫く実

家にて療養せしめることとす。七月富之助痔の手術をする。良子また肥立ち必ずしも良好ならず、八月二十八日漸く横浜に来る。良子姉浅川とめ子の長女文子八才、横浜の小学校入学のため、祖母即ち良子の母と女中十六才を伴い余が本牧小港の宅に入る。富之助は手術後療治の要ありて新潟に残し、とめ子これを預かる。即ち文子の大鳥小学校に入学手続きを了え九月二日よりの登校を待てり。

一朝朝、なま温かき南風やや強く時々小雨を交え不快指数高きが如し。余は小港より市電にて桜木町駅前にある住吉町六丁目時事新報支局に至る。この間距離にして約四キロ、午前十一時半頃、来客あり二階応接室にて話す。五十分、突如強き衝撃を感じ。間もなく建物全体があたかも海上にある船の如く高く持ち上げられる如くして四辺一瞬にして晦暝となり、アット言う間なく室外廊下に放り出され氣付いた時は廊下に続く階段から転げ落ちて居たり。

運良く階段の直ぐ表は玄関であり、転げ乍ら外にでることができ、その時の来客は既に余より先に外に出ていづくえか去り居れり。先ず立とうとすれども腰をしたたかに打ち立つことを得ず、眼前の建物悉く崩壊し土砂煙にて夕闇の如し、地なお震い漸くにして大地震なることを覚る。それまでは地球の崩壊到来したかとのみ思い込み居れり。

震動する大地の上に暫く横たわり居りしも、瞬間家に残せし年老いたる母、幼き姪のことを思い、痛む腰を無理に立ち上がり、傍らにありし棒切れを杖に一先ず這う様にして駅前の河岸に逃る。

河岸には千登世の老女將即ち椎野の義母、十余人の男、女中に護られ啞然として立つに遇う、早く逃れる様言い残し余は本牧自宅に向かう。既に崩壊建物の諸方より黒煙の上がるを見る。いよいよ大火災に及ばんと思ひ、混乱と助けを呼ぶ叫号の中を出来るだけ大通りを選び本牧に向かう。海岸通りグランドホテル前には火煙立ち外国婦人等が全裸の姿にて泣き叫ぶに会う。両側の崩壊建物は火煙を發し、道は殆ど地割れでともすれば地裂の中に足を取らる。道傍には焼死の人体幾つかあり、漸く海岸通りより小港に続く埋め立て地を通り辛うじて自宅に辿り着く。その時、市の中心部を望めば黒煙もうもうと天を覆い全市殆ど火災の中に包まる。

勿論、家は地上に瓦屋根を上にして崩壊し、隣家より既に火を發し近寄るべからず。家族を声限り求むれども片影もなし。暫く啞然として立つ。ややありて母と良子の姿を認む即ち家族の安否を問うに姪と女中が見当たらず途方にくれ居るところなりと言う。地震の時、母と良子は茶の間

にあり、姪と女中は台所にありし。瞬間にして棟、柱崩れ、母と良子は相抱き合つて屋根の下になる。暫く暗黒の中に身動きも出来ず居りしが、かすかに屋根の裂け目から明かりを認めれば静かに体を動かし、非常に長き時間を掛けて上の瓦を掻き分け、漸く二人して這い出たるが、姪と女中は先に逸出したるものと思ひ探しに歩きしが見当たらず、或いは台所にてそのまま圧死したるにやと言う。既に隣家より發したる火災は強風にあふられ紅蓮の炎は烈勢となり、そこに留まるを得ず、已むなく三人急ぎ付近の丘陵の山林にかけ登り一時難を避く。いまや火災は延々と諸方に起り本牧一面、火の海となる。避難の人々続々と丘陵に集まり、生色なくただ啞然として黒煙と共に燃え広がる山下を望むのみ。

丘陵を更に登りしところに牧牛舎あり、その牧場に避難しその夜を過ぐす。天空は真つ赤に地上の火災を反映し地獄の光景なり。食を求めるすべもなく辛うじて牛乳五合を分けて飲む。翌二日、暁を待ちて吾独り山を下り家に至る。一日にして見る限り廃墟の焼け跡に不思議にも我が家のみ崩壊したるまま残れるを見る。

偶、付近に來たりし一人の若者に事情を話し、我が家の台所と覺しきところの屋根をはがし、約二時間許りも費や

して探したるに、哀れ梁の下に姪と女中が抱き合つて息絶えており。その内、知人の見舞いに来れるものあり、力をあわせて二体を出し一先ず山林の牧舎に運び、また他の知人の好意によりガソリン一瓶を入手し、その夜吾れ一人、山林の奥にて二体を火葬に付す。

三日昼頃、新潟より救援の兄、店員二人を随えて来る。直ちに徒歩、焼け野原の横浜市中を逃れ、神奈川より舟にて鶴見へ至り徒歩して東京郊外に至り、山手を巡りて埼玉県大宮に一泊して、翌四日、自動車を借上げ碓氷峠を越え長野に一泊し、翌五日、直江津、三条、漸く新潟に帰るを得たり。

この時の関東大震災は、公表東京横浜に於いて死者十三万余、焼失家屋四十万戸、その内横浜のみにて死者七万、焼失家屋十万戸、実数は更に若干上回るべし。親戚としては、早野連之助氏の夫人の被災最も惨鼻^{「マヤ」}を極む。殆どこれを書くに忍びず、後年まで連之助氏語りて暗たり。他は推して知るべし。

余は家族と遺骨を新潟に送り再び横浜に帰りて支局再建に努力す。開港五十年以来築き積み重ねたる独特の横浜文化は一朝にして廃墟^{「マヤ」}となり、再びその面影を見ず、その後の再建横浜は俗悪安価な模倣文化の近代都市となる。

この年十月、政府は普選実施を決定す。国民の政治教育の重要性が識者の間にたかまる。余が青年時代、静岡県安部郡長たりし田沢義鋪先生、その後内務省を辞し財団法人協調会の常務理事に就任し、一方断えざる青年教育に献身す。偶々、近く普選実施に伴い青年の政治教育による政界刷新を意図され、同志と共に新政社を創立せんとす。妹尾幸三、坂本昌之、増田作太郎三氏と共に余招かれてこれに参劃す。

大正十三年（一九二四年） 三十一才

時事新報本社総編集部に転任及び退社

新政社同人

横浜支局長より東京本社総編集部詰を命ぜらる。良子、富之助を連れ横浜柏葉の閑静なる一軒に定住、そこより東京に通勤す。余が任務は朝刊受持ちなれば夕方より出勤し市内版を終わりにて帰る。平日終電にて毎夜午前一時を過ぐ往々にして桜木町より約五キロを歩む。

関東大震災は、時事新報社にも甚大なる影響を与う。本社再建の容易ならざるに加えて内部人事に紛争起こる。時事新報社は明治十五年福沢諭吉によりて創刊、爾来慶応義塾出身者によりて経営執筆さる。従つて塾外の者はいかに

有能なるも重役たるを得ざる不文律あり。三月、編集局長明石徳一郎氏（塾出身）より呼ばれ社会事業部次長の就任を内示さる。翌日、退社の辞表を提出す。

新政社の青年教育運動に専念することを決意す。新政社はこの年一月に政治教育雑誌「新政」を発刊し、毎号これに執筆す。五月総選挙行わる。

大正十四年（一九二五年） 三十二才

新日本同盟創立に従う

「欧米都市の発達」を著作

次男政治生まる

この頃、定収入なく生活最も困窮す。もとより新潟実家その他より一切の援助を乞わず良子よくその貧窮に耐ゆ。某日、客あり呈するに饗食の資なし、終日、到来の果物を以って三食に換ゆ。某日、余が臂衷に腫物生ず、良子をして剃刀をもつて切開せしむ、医礼を欠くればなり。次男生まれ、爾来数年二児を抱え良子の最も苦闘の時なり。

三月、長年国民要望の普通選挙法決定、識者の政界刷新の声起こり、期せずして新政党樹立の気運高まる。三月、近衛文麿、後藤文夫、田沢義鋪、丸山鶴吉、関口一郎氏等發起し、新日本同盟を組織し、官界、政界、財界、学界の

新進少壮を糾合せんとす。田沢氏の紹介にて後藤文夫、関口一郎氏等を知る。即ちこれが創立に従う。初め事務所を芝公園内協調会館に置き、後年日比谷公園市政会館に移る。会は関口一郎氏主宰し、会計を山本熊太郎氏担任、いまや、新政社の同人として地方の政治教育運動を助けると共に新日本同盟の会務を行う。

この四月、先に欧米に渡り近代欧米都市の発展を視察調査したる資料を纏め「最近欧米都市の発達」を新政社より発刊す。（菊判二七三頁）

大正十五年（一九二六年） 三十三才

（改元 昭和元年）

父久治郎死去

新日本同盟調査主任

新政社同人

大正天皇十二月二十五日崩御、二十六日摂政皇太子踐祚、昭和と改元。

普選実施と共に労働運動、社会運動は急激に活発となる。日本共産党の再建、社会民衆党、日本労働党の結成あり。既成政党は旧態依然にして党利主義に終始し、何等の新状況につき対策なし。

進歩主義、新自由主義の新政党組織の準備運動として発

足したる新日本同盟は、貴族院の近衛文麿公を中心として
官界の後藤文夫（台湾総務長官）田沢義鋪（元東京市助
役）丸山鶴吉（警視總監）関口一郎（元二六新報主幹）氏
等が中軸となつて各方面に働きかけ、また各地に支部結成
を計画したり。横浜支部創設、堀切善次郎氏（神奈川県知
事）を中心に官財界の有力者数十名会員に加盟す。

新日本同盟の調査部主任として内外政治状況について
時々パンフレットを会員に配布す。会員は全国の有識者約
千余名に達す。

昭和二年（一九二七年） 三十四才

新日本同盟調査主任

選挙粛正同盟理事

新政社同人

三月、渡辺銀行取付けに端を発し国会に於いて片岡蔵相
の失言問題起り、政友会総裁の機密費問題で乱闘起る。
財界は神戸鈴木商店破産から終に台湾銀行の取付けに及ぶ。
株式界は恐慌状態、銀行取付けは全国に及ぶ。四月、若槻
内閣は総辞職、代わつて田中義一（政友会）内閣成立。六
月、憲政会、政友本党合同して民政党を結成。（総裁浜口

雄幸）

政界粛清は選挙の粛正にありとて田沢義鋪氏選挙粛正同
盟を組織し、選挙費用は選挙人負担の原理を実行せんとす。
理事 田沢義鋪、後藤文夫、関口一郎、上田貞次郎、丸山
鶴吉、橋本清之助、二荒芳徳、増田作太郎、会員約四千名。
選挙粛正の地方講演に度々出張す。

昭和三年（一九二八年） 三十五才

新日本同盟調査主任

新政社同人

選挙粛正同盟理事

「英国三大政党の政策と其推移」を著作

一月、衆議院解散、最初の普通選挙二月行わる。与野党
ほぼ伯仲す。無産党始めて八名を選出す。

陸軍の対支、対満政策、愈、積極性を帯ぶ。五月に済南
事件を名として山東省へ出兵、六月、満州関東軍河本参謀
らによる張作霖の爆殺、所謂満州事件起る。

十一月、天皇即位式行わる。

外に満州事変あり、内は依然既成政党の党略闘争に明け
暮れる。政党政治の在り方に就いて英国の三大政党の近況
を調査し、これを「英国三大政党の政策と其推移」に纏め

新日本同盟より会員その他へ配布す。この頃より新日本同盟事務所に関口を中心として後藤、田沢、丸山の幹部の外、桜井轍三（元時事新報政治部長、毎日顧問）緒方竹虎（朝日）河野秀男（会計検査院次長）根岸（一ツ橋高商教授）上田貞次郎（法学博士）等常連として時々集会して時事を討論す。高橋雄豺（警視庁警務部長）を識る。

昭和四年（一九二九年） 三十六才

新日本同盟調査主任

新政社同人

選挙肅正同盟理事

満州事変、政界にて重大問題となる。七月、田中義一（政友会）内閣総辞職、浜口雄幸（民政党）内閣成立。全国的に不景氣深刻となる。十月政府予算の縮小の手始めとして官吏一割減俸を発表し、世上騒然となる。失業者約二八万人（内務省発表）

安岡正篤氏の「貞観政要」の講義を新日本同盟事務所に後藤文夫を初め内務省官吏有志十数名と共に聴く。安部十二造、町田辰次郎氏等を知る。

昭和五年（一九三〇年） 三十七才

新日本同盟調査主任

新政社同人

選挙肅正同盟理事

次男政治（六才）没

一月衆議院解散、二月総選挙の結果、民政二七三、政友一七四、無産党五となる。統帥権問題起こる。浜口内閣の緊縮政策は不景氣を促進し、米価及び生糸暴落を誘引し、農山村の疲弊愈深刻となる。一方都市の失業者は益々増加し内務省は三十二万と公表す。労働争議も全国的に蔓延し、この年九〇一件、参加者約八万人を数う。農山村の窮乏は農家の借金増加となり、子女を身売する弊風行わる。この頃より軍隊に入營する農山村の若者よりその窮状を訴えられる軍の少壮の間に政府の政策批判の声起こる。一方、左翼運動の抬頭に反発する右翼運動者の軍接近が目立つ。かくして九月、陸軍中佐橋本欣五郎を中心に陸軍部内に桜会と称する国家改造運動を企図する秘密結社が結成される。政府は七千万円融資を以って農山漁村救済に当つ。しかも日銀の正貨準備ついに八億六千万円に落つ。八月、浜口首相、右翼のために狙撃され重傷を負う。物情騒然たり。政界は依然として旧態、政府刷新の急務を叫ばれながら新風の氣運未だ起こらず、識者徒に憂慮するのみ。新日本同

盟の新党組織の運動も理想主義者多く実行性欠く。

九月二十二日、良子、富之助と政治の二児を連れて鶴見花月園に遊ぶ、帰りに夜に至り政治発病。診断の結果、疫痢。翌朝横浜病院入院の甲斐なく没す。享年六才、悲痛限り無し。当座力の抜けたるが如し。

昭和六年（一九三一年） 三十八才

新日本同盟調査主任

新政社同人

選挙粛正同盟理事

三月、陸軍部内に鬱勃せる政界不満の空気は終にクーデターによる宇垣一成大將を擁立する軍内閣を樹立せんとす。民間より右翼の大川周明等参加し橋本中佐の桜会を中心として事まさに実行に移らんとして陸軍首脳によりて押さえる。所謂、三月事件なり。橋孝三郎水戸に愛郷塾を結成す。

四月、重傷の浜口首相に代わりて若槻礼次郎（民政）内閣成立、官吏減俸令いよいよ公布。陸軍首脳は揮下の国内不満を押さえるためややもすれば満蒙経略による安易の途を執らんとす。八月、南陸相満蒙問題に対して政府攻撃の意を表明す。九月、柳条溝の満鉄線爆破を口実に関東軍軍

事行動を開始、朝鮮軍越境して満州に入る。即ち満州事変起こる。政府は不拡大方針を声明したれど、事實は更に進展し、関東軍チチハルを占領す。十月、相呼応して再び民間右翼の大川周明等の参謀本部内少壮軍人と結ぶ所謂錦旗革命（十月革命）の計画が発覚す。事態の急迫に対し安達内相は民政、政友の協力内閣を唱い、終に若槻内閣総辞職す。犬養内閣成立す。

新日本同盟の同人、幹部、時局の急迫を憂い貴族院の憤起を促すため近衛公等に進言するところ多し。

昭和七年（一九三二年） 三十九才

国維会創立に従い同幹事

斎藤内閣農林大臣秘書官（高等官五等、従六位）

この年をもって日本国家が運命の大東亜戦争に突入する契機とす。政府の不拡大方針に拘らず軍の満州経略は着々実行さる。一月錦州を、二月ハルビンを占領し、更に上海総攻撃を開始し天下の耳目を驚かしむ。しかも国内に於いては衆議院解散、右翼による前蔵相井上準之助の射殺（二月九日）、三井合名団琢磨^{（註）}の暗殺あり。物情騒然たるうちに満州国建国の宣言（三月一日）ありて全世界を震駭す。かかる時に五月十五日、陸海軍の兇徒等総理大臣官邸、内

大臣官邸を襲撃し、犬養首相を射殺す。

これより先、事態不穏容易ならざる空気を憂い前年来、識者の中正なる国民運動を急務とし、安岡正篤の斡旋により酒井忠正、後藤文夫、吉田茂（内務省社会局長官）、松本学、湯沢三千男（知事）等協議し、国維会を組織しこの一月発会式を挙ぐ。その事に町田辰次郎と共に参画す。

五・一五事件の勃発により内閣総辞職す。既成政党による内閣組織は事態を一層紛糾せしむるため斎藤実海軍大将に大命降下し五月二十六日、内閣組織さる。後藤文夫（貴族院議員）農林大臣として入閣す。貴族院の伊沢多喜男氏湯浅倉平氏等の推輓による。内相には長老男爵山本達雄を当つ。蓋しこの内閣の当面の課題は、陸軍の満蒙経略、延いては対支強硬を押さえ現在以上の軍行動の不拡大を堅持し、内には親軍右翼による国内政治不安を取り除くことにあり。従つて陸軍を押さえるために海軍の長老を首相に、貴族院の長老たる山本老を治安の任に置く。而して少壮軍人の革命意欲をややもすれば醸成し居れる農村窮乏に対する緊急処置を重要な使命とす。後藤文夫はかくの如き期待の下に農相に拔擢せらる。

後藤農相の内交渉は既に組閣数日前にあり、同時に余は後藤より秘書官として協力すべきを請わる。山本男は元来、

日銀総裁を経歴し寧ろ財界の大御所にして内政は全くの素人なり。従つて内務省出身の後藤は同郷（大分県）の先輩としてもその議に與ずからざるを得ず、山本内相の秘書官に時事新報社編集局長明石徳一郎就任す。凶らずも先年袂を分ちたる先輩なり。爾来、明石とは深交をなす。前内閣の農林次官石黒忠篤氏は既に辞表を提出し居れるも、後藤再三懇請して留任を得。石黒は後藤と大学同期の友人、農政の大家なり。

農村窮乏救済は当面緊急の政策なり。七月調査によれば農村欠食児童全国二十万を越す。即ち経済更生部を新設し、農村経済建て直しのために諸策を講ず。農村は窮乏のため近年借金は非常に多額となり利息すら支払できず子女の人身売買行わる。九月、金銭債務臨時調停法を定める一方、計画的に農村経済再建のため農山漁村経済更生計画助成規則を制定す。これがため農林省議は連日日夜を分たず、晩に及んで終わること珍しからず、農林全省を挙げて緊急対策を講ず。余は就任以来、自宅（横浜）に帰らず殆ど永田町農林大臣官邸に寝泊りす。

斎藤内閣成立後幾許もなく満州国承認を議会にて可決、日滿議定書調印さる。

昭和八年（一九三三年） 四十才

農林大臣秘書官

正六位（十月十六日）

高等官四等（九月三十日）

満州問題に伴いわが国の外交はいよいよ困難となる。国際連盟は日本軍の満州撤退勧告を可決。わが国は連盟脱退の已むなきに至る。陸軍の指導によってわが国より多数の官民が満州国建設のために続々渡満する。

後藤、石黒農政は只管農山漁村の更生に苦心す。農村負債整理のために特種の組合法を作る。米穀統制法、外米輸入制限法を公布した。米価維持のため作付転換法を計画したるもこれは軍部の少壮派を背景とする民間右翼の非合法運動の間にも軍部の少壮派を背景とする民間右翼の非合法運動はその跡を断たず五・一五事件求刑反対運動を中心に七月には所謂、神兵隊事件起きる。

三月三日、突如として東北三陸地方に大地震あり、特に三陸海岸の津波にて死者千五百名被害莫大なり。直ちに農林大臣に随行して被災地を視察する。釜石より三陸沿岸の被害惨状目も当てられず、往年の関東大震災を思わしむ。

この年の後半より、農山漁村自力更生運動のため後藤農林大臣に随行して全国各府県を激励指導に歩く。農村中堅

青年養成のため農民道場を全国十二ヶ所に設置することを決定す。

十二月、皇太子明仁誕生せらる。

昭和九年（一九三四年） 四十一才

内務大臣秘書官（岡田内閣）

四月、帝人疑獄事件起こり、黒田大蔵次官起訴され、政局は俄に動揺す。政財界要人の連座するもの続出、ついに七月、斎藤内閣総辞職するに至る。西園寺公、重臣と協議して岡田啓介海軍大將を後継首相に推す。

即ち七月五日、宮中より退下したる岡田大將は首相官邸に後藤農相を招致し組閣に着手す。従つて余も亦組閣の事務に従う。岡田大將代理として民政党の首領若槻礼次郎氏へ民政党の支援を依頼する使者として赴く。また石黒忠篤氏への農相として入閣を懇請に行く。石黒氏は堅く辞退す。八日、岡田内閣成立、後任農相は政友会を脱党したる山崎達之輔氏。後藤は内務大臣に就任す。岡田首相の交渉を受け退出するや余を招き、後藤曰く私意を以つてせばこの際、入閣せざるを得策とす。しかれども時局は極めて重大にて徒に保身を許さず、先輩（伊沢多喜男氏を云う）の勧告また無視すべからず、恐らく内相就任はわが政治生命の最後

とならんと苦衷を語る。今は一身のことにあらず俱に難に赴くのみと、即ち内務大臣秘書官を応諾す。

ときに時局の風潮滔々として右傾し、軍部並びに右翼の隠然たる潜在勢力は大河の流れるが如く治安の責務は最も重大なり。先に三月、財界の武藤山治氏の暗殺あり、十一月、陸軍士官学校教官将校のクーデター計画あり、十二月、少年血盟団の西園寺公暗殺の計画あり。即ち内相就任と共に治安の要職に土木局長唐沢俊樹を警保局長に、小栗一雄を警視總監に挙ぐ。この時以来両君との接触始まり、爾後親交をなす。

常に軍部の動静を知るは治安の上に必要とし、余は特に陸軍省軍務局の要人軍務局軍事課長武藤章大佐、佐藤賢了中佐と親近す。

前年農林省在任中、農村匡救事業の一として農村の自力更生を提唱し、政府の救農政策と併行して農村毎の更生計画を樹立せしめる。しかもこれが為めにはたんに農林省の指導だけに委されず、民間に於いて直接指導するの要あり、内務省転任後一日、余は三菱総本社の総理事船田一雄を訪ひ、そのために若干の援助を請う。数日にして船田氏より電話あり、三菱として十五万円を寄付する旨承諾あり。直ちに後藤内務大臣に報告し、これが具体化を図ることとす。

即ち農林省の小平局長、竹山裕太郎技師を招きその計画案の起草を依頼し、財団法人農林更生協会を十二月創立の運びに至る。理事長に石黒忠篤氏を推し理事に那須浩、橋本伝左衛門等農林界の指導者を選ぶ、余また理事の一員に加わる。

昭和十年（一九三五年） 四十二才

内務大臣秘書官

高等官三等（七月一日）

従五位（七月十五日）

軍部並びにこれに同調する右翼勢力の議會に対する圧迫は次第に緊力を加えて來たる。一月衆議院に於ける斎藤隆夫議員の軍事費偏重予算の非難演説は終に同議員の辭職を余儀なくせしめ、貴族院に於いては美濃部達吉議員の天皇機関説を取り上げこれまた議員を辭任せしむ。所謂、国体明徴の論議盛んに行われ、在郷軍人会は天皇機関説の排撃と国体明徴を宣言すると共に真崎甚三郎陸軍教育總監は全軍に対して国体明徴を訓示す。衆議院もまた国体明徴の決議案を可決するに至る。

しかも陸軍内部に於いても統制派に対抗して皇道派と称する極右の排撃運動は益々熾んになり、七月、村中、磯部

両中尉は公然と肅軍意見書を發表す。皇道派の総帥と見られたる真崎大将教育總監罷免さる。この前後、部内の空気は甚だしく動揺す。余は統制派の武藤軍事課長、佐藤中佐より時々その情勢を知り憂慮す。果然、八月十二日、軍務局長永田鉄山少将（統制派）白昼陸軍省に於いて皇道派の相沢中佐に刺殺さる。

かかる情勢なれば軍部の余勢を籍る民間右翼の中にはやもすれば暴力をもって社会の安寧を脅かすもの輩出す。即ち内務大臣としては治安の要として暴力団狩りを全国警察当局に指示す。（五月）

また政治の公正と弛緩せる政党政治の基盤の肅清を期して選挙肅正の運動を起す。先に田沢義輔氏等の選挙肅正同盟の運動を政府の運動とするため、六月内務大臣の要請によって新たに選挙肅正中央連盟を組織す。

昭和十一年（一九三六年） 四十三才

内務大臣秘書官辞職

前年の永田軍務局長の刺殺事件は、陸軍部内の統制派と皇道派との対立を極度に先鋭化した。この軍内部の紛糾を奇貨として政党間に燃る反軍思想はやもすれば政府に対する反抗となつて現れ、一月野党たる政友会は内閣不信任

案提出を決議し、衆議院は解散となる。この総選挙は二月二十日行われた。内務省は事前に既に選挙肅正運動を徹底に行つたために議会総選挙始まって以来の好成績をあげ朝野共に「金のかからぬ選挙」に満足した。

その選挙の夢未だ醒めやらぬ二十六日晚、突如として所謂二・二六事件が突発した。この前晚、余はあたかも横浜本牧の自宅に帰つて居た。総選挙の期間、内務大臣官邸に起居し、選挙終了後、偶、河田内閣書記官長と内閣官邸記者団との間に紛論が起り、その調停のため引き続き同官邸に宿泊し二十五日夜漸く解決したので久し振りに本牧に帰宅した訳である。午前四時頃、後藤大臣から直接電話で事件の発生を聞き、直ちに車で渋谷の大臣私邸に午前五時十五分頃到着した。私邸には警戒の警察官が三、四名いたが私邸襲撃の恐れありとのことで付近の一宮房次郎邸に行きそこより各方面との連絡情報を集めた。九時頃、福田首相秘書官から余に電話あり、岡田首相は無事、官邸内にて護衛の警察官によって保護されて居るの内報を得、直ちにその旨と総合情報を併せて宮内大臣湯浅倉平氏に後藤大臣より取り敢えず報告した。余は国内治安の状況を刻々集めたが何分にも警保局の幹部が全部京都出張（警察部長会議）中と思う様な連絡が取れず、十一時半頃日本青年館に至り

田沢義鋪氏と協議打ち合わせ、そこより警保局、警視庁に治安の厳命を指示し、同氏と三人で坂下門より宮城内に参入した。この間、知り得た状況は後藤より三度、湯浅宮相に報告してあり、宮相よりも外部の状況を出来るだけ詳細報する様要請ありしも宮中には既に内閣の各大臣前後して参入し居るとのことにて正午頃に宮内省に至る。それより約三十分後小原法相の到着を待ち臨時閣議を開いた。この時は、岡田首相は射殺されたと各閣僚信じ切つて居り、それを直ちに首相無事の旨を報告することを憚つた。何となれば川嶋陸相の態度が明確でなく、万一それが外部に洩れ、首相官邸占領の反乱軍に伝わらば、官邸内に私かに保護し居る首相の安否を極度に氣遣つたからである。今は何としても首相を官邸から無事救出すべきことが緊急事であつた。後藤大臣は湯浅宮相と協議し、岡田首相不在として後藤を臨時総理大臣としてその夜全閣僚の辞表を取り纏めて奉呈した。

この間、皇道派の將軍らしき者、屢々閣僚集合室に入出し形勢甚だ穏やかならず、余は警察、陸軍省、憲兵隊と連絡し反乱軍の状況を刻々後藤並びにその他閣僚に報告する傍ら、小栗警視總監と私に岡田首相救出の方法を打ち合せて。方法は唯一つ反乱軍が岡田首相と誤殺したる首相

実弟松尾大佐の遺骸を収容受取りに官邸に行き、その際首相を何等かの方法で無事救出することであり、小栗もその方法を真剣に考究した。時日は経ち焦慮すること甚だしく幾度か神田錦町警察署（警視庁は反乱軍に占領され、ここに臨時警視庁を設置）に足を運ぶうち二日目の正午頃、福田秘書官から余に電話にて只今総理は無事脱出した、至急宮中に参内するから手配頼むとあつた。余は雀躍して直ちにこれを後藤に報告する一方、首相脱出先の本郷の寺院に急行した。恰かも首相は福田、迫水両秘書官と昼食中で無事的首相の顔を見て思わず涙ぐむを耐えられなかつた。総理の参内に就いては、途中並びに宮城坂下門の護衛する陸軍の嚴重な歩哨を穏やか突破する必要があるので暫時の猶豫を請い、一先ず総理の無事を宮中に報告するため其処を退出した。道々首相の無事宮中参内を考えつつ一案を得て宮中に一旦戻り、以上の状況を後藤並びに各閣僚に報告すると共に首相参内の一任を得て、再び宮中を出て追手町テウマチの東京憲兵司令官岩佐礫郎憲兵少將の官舎に赴いた。同少將とは数年前より特別懇意にし、人柄も十分信頼出来る人物であつたからである。刺を通ずると、司令官は風邪のため四十度の発熱で臥床しつつ枕頭マクラに部下を集め会議中であつた。余は非常に重大なことで宮中からは非面会したいと申

し入れたところ直ちに病室に通され、また人払いをしてくれた。

余は岡田首相が無事であり、しかも現在反乱軍の官邸から脱出されたことを話し、今夜何としても宮中に参内したいから協力して貰いたいと話した。純情な岩佐少将は私の話を終わるまで聞かぬうちははらと涙を流し、「自分の身を賭して総理を無事宮中に御案内します」と言ってくれた。余は発熱四十度の痛々しい司令官を伴って本郷の首相休息の寺院に向かった。七時頃、岡田首相は東京憲兵司令官の車に同乗せられ、無事坂下門を通過して参内した。

二・二六事件は、齋藤内大臣、高橋大蔵大臣、渡辺陸軍教育總監を殺害した。東京は戒厳令を布告し、天皇の命によって反乱軍の武装解除を令し、二十九日一先ず原隊に復帰終結した。

岡田内閣総辞職した為、後藤も余も五年振りで野にさかった。代わって広田弘毅内閣成立。この際、田沢義輔氏は文相就任の交渉あり、同氏より夜中電話以って意見を求める。恐らくは先生理想実現の時機あらざるやと答う。

二・二六事件は終に来るべきものが来たと云う一言に尽きる。こと軍部にありと雖も治安の任に当たりし我等の責任は極めて重大である。事前にかかる逼迫したる空気を感

知し得ざりしには非ず、余の私的情報網は極めて不完全なりしも総選挙後六日間に今より思えば二、三軍部不穩の情報を耳にしたることは事実なり。さりとてこれを検討するいとまなかりしことも事実なり。仮りに治安当事者に通報したりとするも軍部内のことは容易に真偽を確かめ得ることは至難なりし許りでなく、一時押さえ得たりとするも早晩、起るべく避けられざる必然性が既に五・一五事件以来、わが国には醸成しつつありしなり。

かくして時代の急潮は、堰をきって奔流し始め、この後九年、その止まるところを知らずして運命の迫るべきを辿りたるなり。(↓別稿1 二・二六事件)

昭和十二年(一九三七年) 四十四才

東京に事務所を設く

公田連太郎先生の漢学講義

足利紫山老師の提唱会を開く

二・二六事件の後、国内外の時局は急激に進展緊迫しつつあり、前年にはドイツはロカノル条約を一方的に破棄し、ラインランドに進軍するに至り、イタリアはエチオピアを併合する等ファシストの進出の目を瞪るものあり。日本は広田内閣の下に終に日独伊三国防共協定を調印するに至る。

すべて目に見えざる軍部の力による政治過程を押し進まれ、この年二月中旬内閣たる広田内閣も軍部の強硬態度に抗し切れず、陸相問題にて成立十一ヶ月にして総辞職。代わつて林銑十郎陸軍大將に大命降下の已むなきに至る。

林は一武官としては兎も角、政治能力皆無の人物にして、流石に露骨な軍部内閣に対し、世論は囂々たるものあり。これまた四ヶ月という短命にて瓦解し、ついに近衛文麿内閣成立す。

近衛公に対する国民の期待は、公の名望を以てせば軍部の強硬を押さえ得ると云う点にあり、その意味にて久しき以前より識者の間に公の出馬を待望し居り。現に二・二六事件直後、元老西園寺公の推輓ありと雖も慎重なる公は再三固辞して広田氏に大命降下したる経緯あり。この度はいよいよ時局收拾に乗り出したるものなるが、時勢は公の意図に拘わらず、拡大の一途を辿る。新内閣成立一ヶ月にして対支戦争は華北総攻撃の開始、上海の日支軍衝突、十一月には遂に日本軍杭州湾に上陸、上海南京占領す。国内は否応漸次に臨戦態勢に移行せられ、政府は国民精神総動員計画を発表す。

かかる時局の刻々たる急変を座視する能わず適確なる情報蒐集と政界有力者の時勢に処する道を得ん微衷をもつて、

麴町永田町二丁目に事務所を設け、そこを本拠として政界、軍部など各方面の連絡を取ることとす。この頃より旧知の先輩湯浅倉平氏（内大臣）、後藤の支持者たる伊沢多喜男氏（貴族院議員）等を時々歴訪して絶えず連絡を取ることとす。

この年、内務省を俱に辞職したる元警保局長唐沢俊樹氏の発起にて漢学者公田連太郎先生より漢文の講義を毎週金曜日午後一時より五時まで受く。最初は書経、ついで易経、資治通鑑。この後約三ヶ年半続く。受講者は後藤、唐沢、小栗一雄の四人なり。

足利紫山老師はもと大分万寿寺方丈にて、後藤家の菩提寺なり。その後、方広寺管長として臨済界の重鎮たり、毎月一回老師を招請して、初めは麴町事務所、後には芝金地院にて老師の臨済録提唱を拝す。多く内務省の知人、二十数名なり。この提唱は戦後まで続く。

昭和十三年（一九三八年） 四十五才

農業報国連盟幹事

当面日支紛争を如何にして收拾するかと云う大きな課題を抱えて近衛内閣は年首来、鋭意苦慮した模様なるも、奈何にせん陸軍の主義勢力を制圧することは一部貴族勢力の

及ぶべきに非ず、一月十一日、御前會議を開いて支那事變處理根本方針を決定したる許りの同十七日、突如として独大使の和平工作打ち切り、爾後、国民政府を相手とせずと云う声明を発表して国民を驚倒せしむ。

爾來、日本は支那に対して戦力をもつて事變處理の方向に進められ、四月には国家總動員法を公布し、六月には宇垣大將を外相に、荒木大將を文相に改造し、杉山大將陸相を更迭して満州派遣軍の板垣中將に入換へ、軍部内閣の様相を呈す。一見、毒をもつて毒を制せんとする近衛首相の意図もミイラ取りミイラになるの危惧益々増大す。この十一月、政府はついに東亜新秩序建設の声明を中外に発し、時局はまた新しく發展す。

この間、屢湯浅内府に私謁して事態の憂慮を訴う。面接ごとに内府の憂色見るに堪えず。

陸軍は予備兵の召集を始む。わが年代の予備兵屢徴召さる。余の身辺も誠に急なり。家事を整理し、何時令状來るも後顧なからん様私かに備う。

先に支那事變勃発するや、政府は民間各団体に呼び掛けその協力を要請し、農業界に於いても各種農業団体の協同組織をもつて政府の農山漁業政策を推進せんとして、十一月有馬農林大臣は関係団体代表者三十名を招請、農林報国

連盟を組織す。余も農村更生協會を代表してこれに連なる。

昭和十四年（一九三九年） 四十六才

北中支戦局視察（四月十九日―五月二十六日）

準戦時下の近衛内閣もいよいよ潮に追いつめられ、昨年未第七十四議會を召集したまま一月四日、ついに総辭職し、代わつて右翼陣營の大御所たる平沼騏一郎男爵内閣を組織す。新内閣成立の翌日、日独伊三国同盟を決定す。この同盟は明らかにソ聯を対象とするものにして松岡外相の強引なる政策なり。半年後、突如として外蒙ノモンハンに於いて日軍は外蒙・ソ聯軍と衝突、わが軍重大なる損害を蒙る。しかも独逸は八月、遽かに独ソ不可侵条約締結を通告す。これがため平沼内閣はヒットラーの前後撞着に抗議すると共に総辭職の已むなきに至る。陸軍大將阿部信行氏に大命降下す。唐沢俊樹を入閣せしめんと武藤軍務局長に薦む。結局法制局長官となる。

日本の対支戦争は泥沼に足を突っ込みたる如く殆ど收拾困難となる。一方、これが日本の國際外交の位置を極めて危殆に追い込みしむ。この年より日米關係は歩一歩重大局面に近付く。同盟国独逸は八月、ポーランドに進軍、英・仏ついに對独宣戦し、第二次大戰の序幕となる。

これより先、四月、支那戦局を視察し、日支関係の実情を調査するため、同十九日より五月二十六日迄約三十五日間、渡支す。羽田より天津に行き、北京、蒙疆、南京、漢口、上海を経て帰る。この行旅豫め陸軍省軍務局の指令を得て軍用航空機を利用し、在支各軍の指揮官、参謀に紹介され、夫々現地にて事情を聞く。日支戦局の如何ともすべからざる膠着の状をつぶさに見る。

昭和十五年（一九四〇年） 四十七才

ドイツの北欧攻略は一転して更にベルギー、オランダの西部作戦に入り、またたく間にフランスを席卷しパリを占領す。イタリアまた英仏に宣戦を布告す。欧州は今や戦禍の中に動揺す。

阿部内閣は右に軍部の強硬派を押さえ、左に議会の政党をなだめ、当面する日支事変の難局を切り抜けることに鋭意したるも、事態は既に奈何ともすべからず、旧臘、衆議院二百八十名の不信任決議を突き付けられたるまま越年し、一月終に総辞職す。軍部特に陸軍の強硬派を制圧するため、海軍の力を借ると云う愈窮余の策を弄する米内光政（海軍大将）内閣が成立す。ここに及んで陸軍の強硬派の勢力は衆議院に直接攻勢進出し、政党内の右翼と呼応し、聖戦貫

徹議員連盟なるもの結成され、政党解消を提唱す。この前後、湯浅倉平氏病氣のため内大臣を辞任。木戸幸一後任に就く。

近衛公、枢密院議長を辞し、新体制運動推進に乗り出すことに決定し、米内内閣半歳にして総辞職し、代わって近衛第二次内閣成立す。近衛の意図は国民総意を新たに結果し、軍部を押さえ時局を收拾するにありと、即ち十月、大政翼賛会を組織し、引き続いて中央協力会議を開催す。議会は政友会、民政党いずれも新事態に備うると称して解散し、政党壊滅するに至る。十二月、湯浅倉平内府逝去。静岡県知事以来知遇を受け、時局艱難の時、しばしば門を犯して策論を献ず。いま遽かに国家の柱石を失う。国家の前途愈寒心に堪えず。

後藤隆之助君は近衛公側近の一人、彼とは日本青年館時代より親交あり、爾来、新日本同盟の創設にも後藤、田沢丸山の三先輩と共に尽力す。時局重大と共に、彼は先に昭和研究会を組織し、専ら政治、外交に重要な研究と政策策定に奔走し、近衛公の新体制運動の基本は、同研究会が約一年に亘って検討す。余も亦昭和研究会同人の一人として殆ど連日、同事務所に狩り出される。同席する者、後藤文夫、笠信太郎、蠟山政道、高橋亀吉等なり。大政翼賛会設

立案に参画す。ただ現実の同会の機能は軍部等の横槍が入り殆ど修正さる。

準戦時下に於ける食料の確保に関し、政府特に増産運動を強力に推進することなり。農相有馬頼寧氏の要請にて農業報国連盟を全国農業団体によって組織され、農相を会長として余は更生協会を代表して常任理事団の一員に連なり、この年六月四国地方の食糧増産推進班長として四国を巡回す。

この年、三月四日、余が横浜時代の親友にして共に独逸に留学した、弁護士椎野郁逝去す。十月二十四日、余が年来育成したる小田島正三（道場監督）結婚。日支事変進展に伴い初めて予備兵として本牧道場の横沢、安河内の両生召集さる。横沢はその後、台湾沖にて戦死。安河内はビーゲンビル島に派遣され、言語に絶する苦闘を嘗めて終戦后帰還。

昭和十六年（一九四一年） 四十八才

農業報国運動、大政翼賛会運動、昭和研究会等関係に奔走

日支事変の収拾は殆ど絶望的状态である許りでなく、寧ろ新しき危惧は太平洋上に生じ、日米間の関係は日に増し

て緊迫化する。国内は殆ど準戦時下に統制化され、大政翼賛会もまた軍部の強制によって改組を迫られる。

元来、翼賛会は創立当初より国内の諸勢力、思想的左右両翼の人物の糾合体にして内部の統一を欠くのみならず、貴族院、学界よりはその公事結社と云う性格、政府との関係（総裁は総理大臣たること）等に対し違憲論も出て屢、難航し、早晚、改組已むなき状態にありしは事実なり。この改組の結果、後藤隆之助君も辞し、後は軍部と内務官僚などによる人事に代わる。

国内紛然たる間にも国際状況は劇しく急転し、前年ヒットラーの独ソ不可侵条約の締結を前提として、四月松岡外相、モスクワにて日ソ中立条約に調印したるに拘わらず、六月ヒットラーはソ聯に宣戦布告し、日本外交上の立場を窮地に陥らしむ。一方日米国交調整は分裂の危殆に瀕し、ついに近衛内閣も万策尽きて総辞職し、東条内閣に代わる。時局は最早、行くところ迄行くと云う最悪の事態に追い詰められ、十二月八日対米英宣戦布告となる。

余は大政翼賛会創立前、後藤隆之助君の昭和研究会メンバーとしてその創案に参加したるも組織体には関与せず、専ら農業報国連盟の常任理事として増産運動に奔走仕事す。これより先、後藤文夫は末次海軍大将の後を受けて大政

翼賛会中央協力会議長となる。十二月八日、第二回中央協力会議召集を予定し、その会長演説草稿を数日前より推敲したところ、同日早暁、宣戦布告あり、草稿を急に改めたるなどあり甚だ匆忙、憂慮の裡に越年す。

昭和十七年（一九四二年） 四十九才

翼賛政治体制協議会事務局長

翼賛政治会事務局長

我が国の緒戦の華々しさに對し欧州の戦況は甚だ芳しからぬ勢を呈せり。即ちヒットラー強引のモスコー進攻も嚴冬とともに膠着から撤退と云う往年ナポレオン敗退の轍を踏む。かかる時に英米を向うに廻して戦う我が国の前途は容易ならざるものあり。

衆議院は昨年四月をもつて議員任期満了したるも、時局重大のため一年延期され、本年四月には総選挙執行に迫まれる。余は新年四日、湯沢三千男内務次官を年賀に訪いたる偶然の機会に、この総選挙の方途について意見を求められたる機縁が所謂、戦時下推薦選挙の発案者となり、実行者とならざるを得ぬ運命に巻き込まれる。

国会創設以来、総選挙は政党の推薦公認せる候補者を選挙民によって選挙せられる慣例なるが、大政翼賛会組織以

来、政党は挙つて解消し、翼賛会内の議会局に所屬し、翼賛会自ら候補者を推薦する外なき有様なり。しかるに翼賛会設立以来、同会の性格に就いて貴族院に於いて種々議論あり、若し政治結社なりとすれば、憲法上の疑義ありとし、政府は屢、その説明に窮し終に公事結社なりと云う弁明をして糊塗するを得ざるところに押し込めらる。従つて今更、翼賛会自ら候補者を推薦すると云う訳に行かず、結局この総選挙が推薦すべき母体を欠く状態にて、その混乱を避け、戦争遂行の新しき国会体制の必要を痛感する政府としては、これがため何らかの方途を講ずべき事態に迫まれ居れり。選挙を管理する内務省としては、当面その直接の担当者として甚だ困惑し、東条首相兼摂内相の下に湯沢三千男氏が、余に意見を求めたるは以上の理由による。

余は、これがため数日間推薦方式に就いて一案を草し、また予め、後藤とも相談し貴族院の有力者伊沢多喜男氏、また貴族院議員として大政翼賛会事務総長の横山助成氏（湯沢氏と横山氏とは親友）にも見せて、これを湯沢次官に提出す。湯沢次官は星野直樹内閣書記官長、武藤陸軍々務局長とも相談し、東条首相の諒承を得て、私案の翼賛政治体制協議会設立の方式を採用することとなり、結局その方途の実現計画の遂行をも余に一切委任さる。

かくして四月政治体制協議会による推薦選挙を会長阿部信行陸軍大将の下に、余は事務局長としてこの戦時下総選挙に於いて歴史上空前の推薦選挙を担当す。

その詳細の経過は〔別稿 2 翼賛政治の顛末〕に記す。

四月三十日、総選挙の結果は翼賛政治体制協議会の推薦したる候補者四百六十六名の中、三百八十一名を当選せしめ、非推薦にて当選したる議員八十五名に対し実に八割一分八厘の絶対多数を占めたり。

当選後の推薦議員の結果に就いて、当然翼賛政治体制協議会は適切な処置を取らざるを得ることとなり、またまた引き続きその方途を草案することとなる。即ち、ここに新政治結社として戦時下の国会運営を期待するため衆議院の翼賛議員を中軸とし、貴族院各派の参加を得て、ここに貴衆両院の議員と、これに財界、学界、農・工業界の代表的人物を一同とする翼賛政治会を組織したり。余その事務局長の職に任ぜらる。

政治会は総裁の下に総務会あり。前田米蔵、事実上総務会長として衆議院の運営全般を総括す。大森これを副とす。総裁を代理して議に与かり、三者会談にて重要政策を決定す。内閣との連絡は横山助成と余が担任す。

戦局は一月マニラ占領を始めとして東南太平洋方面に展

開し、戦線漸次拡大し、殆ど支那事変と同様の危惧を抱く。六月ミッドウェイの敗退は前途の不安を感じず。余、昨年来の疲労に加え急性盲腸炎を患う。九月四日生涯始めて虎の門外科病院に入院す。約三週間湯河原静養。

昭和十八年（一九四三年） 五十才

翼賛政治会事務局長

大東亜戦争戦局拡大と共に、汪兆銘臨時政府の樹立によって支那戦局の解決を急ぐ。四月山本五十六海軍連合艦隊司令長官の戦死伝えられ、朝野愕然とす。緒戦の華々しさより漸く戦争の実態について心ある者をして不安を感じしむ。軍部発表の戦況についても何かしら明朗ならざるものを覚ゆ。

かかる空気は、当然議会にも反映し、両院の運営は徐々に困難となる。政治会の内部にも露に軍部を批判せざるまでも、政治会幹部に対して重苦しき影響を与えり。国民日常生活も次第に物資不足のため不自由になり、切符制の実施となる。

五月初、前田米蔵総務会長と余は、首相官邸に招かれ星野書記官長より学徒動員計画の内容を示され事前の諒承を求めらる。前田氏と共に戦局の切迫を如実に感じ、政治会

に帰りて阿部総裁に報告し、総務会に諮りたり。六月二十五日、学徒戦時動員体制確立要綱が発表さる。慶応大学法学部在学中の富之助、十二月一日、第一回の学徒出陣によって入営す。

昭和十九年（一九四四年） 五十一才

貴族院議員勅選（五月十八日）

翼賛政治会総務

年が明けたるも戦況は、依然はかはしからざるのみならず、次第に最悪の状況に向かう。即ち、二月マールシャル群島の守備、先ず破れ、次いでクエゼリン島、ルオート島の守備隊全滅。三月前年戦死の山本五十六海軍連合艦隊司令長官の後を継いだ古賀海軍大將戦死。六月戦略上の最後の要衝サイパン島を奪取され、マリアナ沖海戦に於いて、わが空母の大半を失う等決定的敗戦の色を濃厚にす。

かかる状況に於いては、国民の不安いよいよ募るばかりにして、追がに近衛文麿、岡田啓介、平沼騏一郎等重臣群もいまは座視するに忍びず、東条内閣の更迭を議す。東条首相も、いまは百計尽き七月十八日内閣総辞職の已むを得ざるに至る。二十二日朝鮮総督陸軍大將小磯国昭、海軍大將米内光政の両氏に大命下り小磯内閣成立す。かかる間に

も戦局は一層悪化の途をたどる許りにて、クアム・テニアン両島の守備破れ、愈米軍の本土進攻拠点をつくるや、矢つぎ早に十月沖縄攻撃を開始し、フィリピン沖海戦を挑まれ、わが海軍の全滅を招く。この頃より米軍は開発中の最優威力を誇るB29を完成し、十一月東京爆撃を開始す。

これより先、敗戦色濃厚となるや、翼賛政治会内部の空気は、次第に東条政権に対する批判的空氣が抬頭し、翼政会機構改革の声挙がる。三月、前田米蔵（総務会長）に言して現在の事務局機構を改め、従来の政党機構に復元し、出来るだけ議員中心主義に改めることとす。五月十八日、政府は言論界の功労者読売新聞社長正力松太郎と共に余を貴族院議員に勅選す。かくて貴族院に議席を有することによって、余は専ら翼政会の貴族院係りとなる。貴族院の所属は先輩後藤文夫、田沢義鋪、石黒忠篤氏等の無所属クラブに入る。

東条内閣の総辞職によって政局は急転し、阿部翼政会総裁は即日辞任し、前田総務会長と共に余も進退を共にす。総裁後任については新総務会長長光庸大の下に四十七名の貴衆両院議員による推挙委員会が組織され、余もその一員に加わる。協議の結果、小林躋造（海軍大將）を推す。小林大將推戴については、永野護氏等の尽力あり。阿部信行

前総裁は小磯首相の後任として朝鮮総督に親任され、遠藤柳作を政務総監として赴任することとなる。阿部総督は余の朝鮮行きを熱望され、それがため京城日報社長の就任を要請する。最早、戦局は決定的にして今は如何にして終戦の方向に導くべきか、国内の動向は極めて緊迫しつつある状況に於いて重大なる政局から遠く離れることに忍びず、阿部総督の再三の懇請にも拘わらずこれを謝辞したり。

昭和二十年（一九四五年） 五十二才

貴族院議員

翼賛政治会総務

大東亜戦争終結 ―敗戦後の混乱

米軍の本土侵攻の様相は次第に濃厚となり、今や、強気一点張りの軍部も本土決戦即応の態勢を整うべく余儀なくされ、国内は異常の緊迫化を呈す。既に国内の諸都市に対する間断なき空襲と共に、戦局はいよいよ最後の段階となる。即ち米軍はマニラを回復し、硫黄島に上陸し、四月ついに沖縄に上陸するに至る。一方、欧州に於いては同盟国たる独伊の敗戦、ムッソリーニの処刑、ヒットラーの自殺により終戦となる。

ここに於いて重臣間の終戦論は急展開し、四月小磯内閣

は総辞職し、鈴木貫太郎（海軍大将）内閣成立す。しかも政府は飽くまで本土決戦を宣言したるも、八月六日広島に、九日長崎に原子爆弾の投下によって、天皇御前会議に於いてポツダム宣言を受諾し無条件降伏となる。三年九ヶ月に亘る大東亜戦争終結す。

これより先き小林総裁の翼政会も、戦局いよいよ苛烈、本土決戦の緊迫化に伴い、国内体制の再編制論に押され、三月ついに発展的解消をし、大日本政治会として改組す。即ち、南次郎（陸軍大将）を推戴し、金光総務会長、松村謙三幹事長を中心として旧民政党、旧政友会の勢力を復活す。

貴族院内の大勢は既に日本敗戦は決定的のものとして終戦の機会を一日も早く捉えることを暗黙の間に認め、既に重臣間と連絡してその方途を講ずる動きあり。余また後藤文夫、伊沢多喜男の下に聊かそれがため各方に奔走す。しかもその方途も空しく広島長崎の巨大な犠牲を支払うに至り、終生の慚愧とす。

八月十五日、終戦の勅語ラジオは築地本願寺に移転したる読売新聞社の副社長室にて高橋雄財君と俱に聞く。直ちに後藤、丸山を訪ね、軍部動搖を如何に鎮撫するかにつき話し合い、数日それに奔走す。

妻良子は先に三月横浜空襲の後長野県野尻湖に疎開す。

五月二十八日、良子兄浅川富治死去。戦時中混乱の列車にて良子と辛じて新潟に赴くが、葬儀に間に合わず。六月十日横浜大空襲あり本牧の居宅爆撃を受け全壊す。留守人不思議に怪我なし。余は岡野繁蔵君の芝高輪の邸宅に寄寓し、貴族院に通う。

八月十五日敗戦降伏と共に米軍の進駐あり、国内今や騒然たり。十二月三日梨本宮を初め東条前首相外軍・政・財界の首脳者戦犯容疑をもつて逮捕の発表あり、その中に後藤文夫も指名さる。同十二日戦犯容疑指名者巣鴨刑務所に赴く。同日朝八時上野毛後藤家にて見送る。十六日、戦犯容疑の近衛公自決す。後藤の戦犯容疑に關し外部より抗告陳情の運動を起こすため同十四日、丸山鶴吉、後藤隆之助、横山正一、岡野繁蔵、伊藤博、森有義、田辺定義、後藤正夫、後藤米夫等の來集を求め、今後の対策を協議す。

学徒出陣にて応召したる富之助、入営以來高射砲隊に所属し東京近郊の陣地を転々し赤羽陣地にて解軍となり、九月六日、一年九ヶ月振りにて帰宅す。終戦前、後備召集の達三、富之助同様応召の初雄、政雄いずれも帰還、十二月一日揃って無事の顔を見せる。朝鮮総督阿部信行大將、終戦後九月二十日、病体にて京城を脱出し、帰京したるをも

つて二十四日、訪問見舞う。

昭和二十一年（一九四六年） 五十三才

依願免 貴族院議員（二月十六日）

公職追放（八月十七日）

終戦後、進駐軍は近く憲法改正の意向ありと伝う。余は丸山鶴吉氏と相諮り、二月十日を期して貴族院の議場に至り、最敬礼をもつて最後の訣別をし、貴族院庶務課長に両者の議員辞職届を提出す。同十六日を以て依願免職の辞令を受領す。二月二十八日、米進駐軍のマッカーサー總司令官は占領治下に於いて所謂好ましからざる人物の公職追放令を発表し、殆どの公職者、戦時中の要職者を公職より除外す。余もまたいずれ巣鴨収容は免れざるものとして、その準備をす。良子、富之助ともに既に東京に帰還し、高輪の岡野邸に仮寓し、次いで横浜本牧の旧宅を仮修理して五月二十日移る。

その引越し準備中の五月十七日、市ヶ谷・国際検事団より召喚を受け、出頭したるも、担当検事病氣なりとのことにて延期されて帰る。超えて六月十日、横浜本牧警察署を通じ再び召喚を受け、市ヶ谷国際検事団に出頭、アメリカ人フラウド検事の訊問を受く。その内容は、軍部との関

係、大政翼賛会との関係、翼賛政治会の経過に就いては極めて簡単な訊問ありしも、陸軍が満州にて大量の阿片を押収し、これを日本内地に流し巨額の資金を作り、これを軍の機密費として使いたりとのことを根堀り聞かれたれど、あまりにも荒唐無稽の噂又は想像なりと一蹴し、午前九時半より約一時間、甚だアツ気なく帰宅を許さる。後日、阿部信行大將を訪問報告したところ、矢張り同日、同大將も、その外に岡田啓介元首相、植田俊吉陸軍大將、桜内幸雄元文相、瀧正雄元貴族院議員が召喚を受け訊問されたりと聞く。

余がこの一月元旦の日記には、『後藤ノ巢鴨ヨリノ救出ガ本年ノ最大ノ仕事。コレサヘ済メバ世ヲ辞シ田園ニ帰ラン』と記す。戦争犯罪人として不当に巢鴨に拘留の後藤をいかにして解除せしむべきか、旧臘より先輩、親近、同志の協力を仰ぎ、各方の連絡、情報の収拾に務め、この元旦にも横山正一、森有義の両君の来訪を求め、対策を協議す。はじめ東京市政会館に仮事務所を設け、毎週一回、有志参集して情報の交換、巢鴨策を協議す。丸山鶴吉、後藤隆之助、堀切善次郎、唐沢俊樹、高橋雄豺、渡辺綱雄、相川勝六、高柳賢三氏等の参集を請う。別に植村救世軍司令官、山室民子女史等の尽力を求め、マッカーサー司令部内に連

絡路線を辿り、また別に国際検事団の二世弁護士佐野熊雄、外人弁護士事務局長ハリス少佐とそれぞれの路線より知遇を得、彼等を或いは料亭に招き、或いは横浜に招待し、或いは劇場に案内し、甚だ不愉快なる御馳走政略を用いて、巢鴨の情報を得、且つ後藤釈放に尽力を懇請す。また三月内務省警保局内に、内密に内務省関係者のための釈放運動本部が設けられ、これまた毎週一回、内務省に於いて協議会あり。余は後藤を代表して出席す。この間、或いは後藤の親戚なる麻生多賀吉、加納久朗氏等にも尽力を懇請し、外務省を通じて司令部内に働きかけたり。また富之助をアルバイトとして市ヶ谷国際裁判所の臨時雇に入れるなどして万一の情報を期待したり。総じてこの一年の救出運動は、情報流乱して一喜一憂、徒に戦勝者に対する卑屈なる劣多くして、その割りに反響、成果なし。

占領下の政府は、マッカーサー司令部の嚴重なる監視下にありて、諸般の情勢は朝令暮改、過酷なる占領政策が日一日と進められる。終戦後、内閣は東久邇、幣原、吉田と目まぐるしく交替す。この間、国内の最大の問題は食料の欠乏にして、都内の配給は漸減し、殆ど絶えんとする許りなり。四月十七日、遇、新橋駅前を過ぐ、戦禍壊崩の路上に餓死の婦人倒れ、傍らに二、三才と覺しき小児、遺骸に

縋つて食を求めて泣く、誠に見るに忍びずと雖も如何ともすべからず、警官に依頼して去る。この朝、新聞は報じて都内の貯米は一日分と云う。街頭は赤旗を翻して共產党指導の大衆デモ連日の如く流れる。五月三十一日、ついに天皇マッカーサーを司令部に訪問し、食糧の放出を懇請す。

先に本牧の居宅戦災によつて爆破され、一時高輪岡野邸に仮寓すると雖も、元來この邸は借家にして借主たる岡野君、既に三軒茶屋に移り、貸主より余に対して再三転居を迫らる。百方都内に居を求むれども、適当な家無く、結局五月、旧本牧宅を応急修理し、漸く移る。六月十六日、良子の母、新潟にて死去。先ず良子を混乱の列車に載せて送る。余はまた十九日夜、上野発。客車は既に人に溢れ立錫の余地なし。已むなく貨車のデッキに縋り、約十一時間、翌朝辛うじて三条に着す。至るところ国内の混乱、概ね斯くの如し。

九月二十八日、アメリカ軍放出の配給牛肉罐一個を家内三人夕食にこれを食す。夜半よりまず良子苦痛を訴う、ついで余もまた七転八倒の腹痛と下痢、さらに富之助もまた倒る。辛うじて近隣に急を伝え医師の診を乞う。三人とも急性猛中毒と判明。良子と余は最も重症、富之助稍軽く、二日三晩、良子と余は意識不明。もし手当て一時間遅れた

れば殆ど死を免れずと後日聞く。このため回復に約一ヶ月を要したり。

饑餓、病氣、至るところの紛糾混乱、まことにこの世ながら地獄の世相なり。しかし乍ら、何かしらこのドン底の中に、余は前途に一縷の光を感じず。六月十二日の日記に『敗戦一年、占領軍治下ノ日本ニ於ケル混乱、動揺、不安ノ社会ハ食糧饑饉ニヨリ一層暗黒現象ヲ呈シタ、然シ日本民族ノ強固ナ意志ト根性ハ再ビ日本ヲシテ起チ上ガラセルデアロウコトヲ確信スル。焦土ノ中カラ盛上カル日本コソコノ民族ノアラユル力ノ総合ニヨル結晶デアロウコトヲ今後十年ノ歲月ヲ経テ初メテ知ルコトヲ確信スル』とあり。

昭和二十二年（一九四七年） 五十四才

閑居耕作

後藤救出運動に奔走

進駐軍の占領政策は、日に厳しく、戦前、戦時中の公職者は、すべてこれを追放したる許りでなく、一月四日、さらに拡大して経済界、言論界に及ぶ。吉田内閣はさきにマッカーサーより憲法改正の示唆を受け新憲法を用意し、昨年十一月これを公布し、本年五月これを施行し、樞密院、貴族院は廃止す。さらに選挙法を改正して四月参議院、衆

議院選挙行わる。総選挙の結果は社会党一四三名の第一党となり、吉田内閣は総辞職して、社会民主連立の片山内閣成る。

この総選挙には殆ど既成の政治家、官僚、財界人が公職追放によって立候補できず、所謂要人らしき人物の出馬なし。運輸大臣増田甲子七君は、唯一の内務官僚中、公職追放を免れたる一人（同君は病気のため戦時中数年間、入院したるため）にして昨年末、同君余が宅に来訪、長野県より出馬の意を表す。これがため余は勿論、内務省の追放官僚、友人等挙って、その選挙を応援す。蓋し占領軍に対する暗黙のレジスタンスなり。長野県第四区より最高点をもつて当選す。前同惜しくも落選したる岡野繁蔵君も静岡県より新代議士として初登場せり。

二月二十五日、マッカーサー司令官は、米国議会への予算削減に対して日本の占領政策なるものを声明す。『戦勝者は敗戦者をして屈伏せしむるだけで足らず、敗戦のショックを以って再戦の意図を破砕するのみならず戦争を再びせざと云う精神革命を当代の国民及び次代の国民迄に与えざるべからず。日本は再戦出来ざる許りでなく今や戦争の脅威たる存在を放棄し、寧ろ再戦を企図するもの（ソ聯を指す）に対する強力なる保壘となり居れり』

先に改正されたる新憲法は、この占領政策を基底に制定されたるものなり。いまや、われ等所謂戦前派人の言論のさしはさむところにあらず。余は既に本牧の山居に退移し、日々読耕に専念す。即ち、この春以来、鳥小屋を作り、数羽の養鶏をもつて一日の食卵を得て足り、地を耕して馬鈴薯、人参、白菜、茄子を植え、わすかに家族の食膳に供す。しかも、なお足らざるは、良子、己が所蔵の衣類を売りに補う。はじめ余これを知らず、良子数日を置いて小風呂敷を携えて外出す。後日、衣類は一枚又一揃のみを売る。

一時に量多く売るのは作戦の良なるに非ずと、聞きて『迫りたる知慧なるかな』と嘆笑す。

この頃、わが友輩にしてその日常の生活に窮する者多く闇屋なるものを商売して東奔西走す。この人にしてこのことあるかと、誠に気の毒なる事例尠からず観る。幸にして余が追放期間中、無為なれども清貧を持して斯くまでに至らざりしは、只われ良子に負うところ大なればなり。

巢鴨の情報は、時々佐野熊雄、ハリス少佐を通じて取聞し、例水曜日正午は、従前の内務省の巢鴨連絡会に出席し、その帰途、午後二時より日比谷市政会館に開く後藤善後会に至りて、情報連絡打合せを行う。この間、巢鴨拘置者のうち二十三名の起訴あり。その中に後藤、指名がありや否

や、また後藤が独房に移されたりとか（独房は重刑容疑）等々の情報に或いは一憂、或いは一喜す。二月二十四日、国際裁判廷の清瀬一郎弁護士の冒頭陳述は、わが意を得たる歴史的証言なり。

戦時中、長野県野尻湖に疎開したる旧外人別荘も大蔵省より買戻の要請あり、遇、三月、小栗一雄（元警視總監）氏の親戚、神戸の中村精七郎氏所有の湖畔宅を売却するとの話を機会にこれを買うことに決定す。戦前、埼玉県の大里郡榛沢村の百姓屋敷を買置きしを売却し、その代金をもって右を買換う。八月、そのため良子と野尻に赴く。この年、十月七日、新潟県三条の病院長齊藤富次郎急死す。良子の姉の夫なり。良子と共に行く。良子は一昨年兄、昨年は母を失い、続いて親戚中の大黒柱たる齊藤を失う。

昭和二十三年（一九四八年） 五十五才

既にマッカーサー占領策は、民主化と称して日本戦前の国家構造全般に亘る無力化を図りたるが、その過程に於いて必然的左傾化を招来す。ここに於いて司令部も俄に、防共政策に転換して過去政策の矛盾を修正せんとす。一月十日、社会党の片山内閣は総辞職し、保守派の芦田内閣に代わる。この間、占領軍内部の醜聞は瀕りと外部に伝わる。

芦田内閣もまた獻金疑獄事件にて、七ヶ月にして瓦解し、第二次吉田内閣に交替し、政界の混乱、殆ど予見すべからず。

巢鴨の後藤救出の運動は、前年より引き続いて毎週水曜日、午前に内務省連絡会議、午後、市政会館に有志集合して行う。二月十一日、ラジオを通して後藤外十九名のA級容疑者に対して第二起訴の報伝う。この日の日記に『愕然トシテ只管神護ヲ祈念ス』とあり、超えて十五日、市ヶ谷の佐野熊雄より然ることなからんとの報告あり、わずかに愁眉を開く。三月三日、再び第二起訴説起こる。同十三日、林逸郎弁護士を介して軍事裁判弁護士フィリップ少佐の談話を聞き稍安心す。七月二日の新聞ワシントン電は第二起訴の可能性充分ありとの報道に又もや暗然たり。総じて一喜一憂、暗中曙光を求めて已ます。ついに最終最悪の日は十一月十二日に來たる。極東国際軍事裁判は東条英機（元首相）等七名に絞首刑、東郷元外相に二十年、重光元外相に七年の判決を下す。この報を聞く国民は万感を胸に秘めて沈黙す。いまや刑の執行に一日一日が薄水を踏むが如き思いなり。第二起訴の情報に翻弄されたるこの一年間の悪夢も、愈々最後の日近づきたるを予感して、内心の落胆掩うべからず。二十三日の暁、刑執行さる。この一日、殆ど

食甘からず、転々として一夜を明く。二十四日朝来雨あり、午睡して鬱を消す、たちまち良子、余を起こして後藤釈放のラジオを聞くと。驚喜して八方確認す。良子を促して野毛後藤家に赴く。

昭和二十四年（一九四九年） 五十六才

マッカーサー進駐軍総司令官に対し請願書を提出

伊沢多喜男死去

横浜より東京に転住

旧蠟、極東軍事国際裁判は、戦犯として東条大将等七人の死刑を執行するとともに後藤外九名を釈放した後、その要務を果たしたものととして軍事裁判終結の宣言を十月十九日に発表す。されど、先に戦争の責任を問う意味にて、全国の数万の戦時中要職者に対して公職追放したままなるが、所謂日本政府政令の第五項に於いて、翼賛政治体制確立協議会構成員並びに昭和十七年総選挙の推薦議員を、該当事者として指定したるは誠に不条理にして、特にこの件に関する限り、その発案者の一人として、また推進者の一人として、責任を痛感し、黙視する能はず。余はそのため今日まで、単独の追放解除申請者にして要請ある人々に対しては、進んで解除理由の証言者として証言書に署名したるも、そ

の数は知れたものなり。ここに余は独自の立場に於いてマッカーサー総司令官に対して、追放令第五項の条項該当者を全面的に解除すべき理由を具述して申請することを決意し、約一ヶ月潜心して請願書〔巻末〕¹⁾を起草し、七月三十日、自身第一生命本館にある米軍総司令部に出頭して提出したり。これを起草したる原案は一応、大麻唯男、唐沢俊樹の両君にも見せ、その書翰の形式、翻訳、印刷は田辺定義君の力を煩わしたり。この申請書のコピーは、ワシントンの極東委員会、並びに吉田総理大臣にも郵送せり。

この年八月十三日、伊沢多喜男翁死去す。後藤を通じ、翁の知遇と薰陶を受けること多年なり。深く哀悼す。

余の横浜在住は大正六年、静岡より時事新報横浜支局長就任以来、終戦前後約一ヶ年を除いて殆ど三十二年間に及ぶ。関東大震災（大正十二年）前の横浜は、明治開港時代の旧情面影を残し居りたるも、右震災と戦災の両度の大破壊のあとは全く旧態をとどめず、ことに戦後は米進駐軍の大規模なる軍施設によって占有され、見る影もなき有り様となる。これがため東京との交通は次第に悪化し、到底永住の地となすべからざるを以って、竟に意を決して住み馴れたる本牧を棄て東京へ転住す。昭和二十四年十月二十九日、岡野繁蔵君の世話にて世田谷区上町四丁目に移転。四

間ほどの中古家屋、庭約二十坪、親子三人の住宅として狭隘とせず。少年時代東京を離れ流浪約四十数年振りにて東京市民となる。移転新居の最初の深夜、外に干したるラクタシャツ上下二着、何者かに盗窃さる、戦後東京いまなお物騒千万なり。

昭和二十五年（一九五〇年） 五十七才

伊沢多喜男氏伝記執筆

小坂順造氏に知遇

追放解除始まる

故伊沢多喜男翁の伝記編纂委員会設置され、その委員の一人となる。はじめ伝記執筆は生前翁の近親たる元国民新聞記者前衆議院議員阿子島俊治君に委嘱したるに未だ執筆に至らざるうちに同君急病にて死去。已むを得ず余専らこれが編纂の任を引受く。翁の生前資料を丸山幹治、横山正一両君の尽力にて蒐集し、約半年を費して漸く稿成る。

確たる月日を記憶せず、某日突然日本発送電株式会社總裁の小坂順造氏より後藤隆之助君と共に面会を求めらる。玉川の私邸に訪れ、数時間時勢の懇談す。爾来、何故か翁より屢々来訪を求められ、食事を共にす。戦前小坂邸は、渋谷金王の後藤文夫邸の筋向いにあり、また軽井沢別荘な

どに後藤と共に何回か往訪し、一応の面識ありしも格別の親交を持ちたるにあらず。殊に小坂氏は現総理吉田茂氏とは、年来の親友にして、現在政界にも隠然たる勢力を持つ言わば当面の政、財界の実力者なり。後藤文夫、後藤隆之助、余いずれも戦後の日陰者なり。いかなる訳にや、小坂翁より特別の知遇を得たるか今に至るまで分明せず。

十月十三日、政府は戦犯該当者を除き、自ら進んで訴願中の公職追放該当者一万九十名に対し、解除の通告をす。前年余のマッカーサー総司令官に対し、十七年推薦選挙の機構関係者並びに議員の追放解除の請願書を提出してより約一年有余、未だ全面解除の趣旨は認められず、その反響のあらざること明瞭なり。

昭和二十六年（一九五一年） 五十八才

財団法人電力経済研究所常務理事

伊沢多喜男氏刊行

小坂日発總裁は電力再編成に基づきその使命としたる日発解散事務を終了して五月、清算事務に移り、ここに戦時中の電力統制の会社は名実共に解散す。この際、總裁は将来日本のエネルギー問題の重要性に鑑み別に財団法人電力経済研究所を設立し、その資金として日発解散経費より三

千万円を支出寄付す。この設立に当たって小坂総裁よりその設立事務並びに運営の常務を委任さる。もとより電力、エネルギー問題等余はその智識、造詣もなく全くの素人なるにも拘わらず、小坂翁の切なる懇請によって引受くることとし、その設立準備に従事す。

かねて余が執筆中の伊沢多喜男伝、漸く完稿し編纂常任委員会に提出し八月これを刊行す。四六判四〇五頁、装幀は故人知己和田三造画伯のものなり。この小伝の著者名は態とこれを記せず。蓋し不徳の小名をもって故人の徳を汚すに忍びざるがためなり。

追放解除を申請する者続出し、政府またその申請に基づき審査し、六月始めて約三千名の解除を発表す。爾来申請者絶ゆることなし。翼賛政治協議会関係者の申請者にして余の証言を求むる者に対し証明者として署名し努めてその便宜を図る。

先年来の朝鮮動乱は、米軍をして屢、窮地に立たしむ、本国軍部とマッカーサー元帥との間に戦略上の意見対立し、この四月ついに元帥罷免さる。後任にリッジウェイ中將就任す。

【別稿 1】二・二六事件（手記②）

昭和十年陸軍の永田軍務局長の刺殺事件は部内の統制派と皇道派との対立を極度に先鋭化した。この軍部内の紛糾を奇貨として政党間に燃る反軍の空気はややもすれば政府に対する反抗となつて現れ、一月、野党たる政友会は内閣不信任案を提出したので、衆議院は解散となり、総選挙は二月二十日行われた。内務省は政党不信の世論、特に軍部の政党攻撃の根本理由であつた選挙の肅正を企図し、前年来、選挙肅正運動を徹底的に行うために田沢義鋪氏を中心とする選挙肅正連盟が創立され、斎藤実前首相が会長となつて全国的な組織作りをやつていたので、内務省はこの情勢に沿つて総選挙の肅正運動を官民合同の力で行つた。その成果は議会始まつて以来の好成績であつた。

この総選挙の夢未だ醒めやらぬ一週間後の二十六日、突如として二・二六事件が突発した。陸軍部内に不穏な空気が漂つて居たことについては従前から予感されて居たもので決して突発的なものではない。内務省では警保局、警視庁の担当官は可なり神経を尖らして情報の入手に必死になつていた。内務大臣秘書官として私の手元にさえ不穏な

情報が年が変わってから急に増えて来たことは事実である。後から考えると何か思い当たることがあったのは、その頃私のところに入入りして居た大森某、松田某の二人から謎の様なことを聞かされたことかあった。現に事件突発の十日前、一月十七日午前一時、警視庁舎の前で部隊不明の陸軍小隊の不穏行動があったと云うことを警視庁から報告があった。こういう持つてくる情報というものは玉石混交て概して信賴の置けないものが多いので、治安の担当官などは絶えず情報の交換と緊密な連絡を必要として居たものである。ただ秘書官という職責は非常に幅広くすれば、限り無く広かつて收拾つかない許りか、諸情報をファイルする必要があつても、現実にはできないし、官制上も許されない。精々、担当官にこちらで入手した情報を連絡する位が関の山であつたし、それにも限度があつた。

幸い、唐沢（警保局長）相川（保安課長）小栗（警視總監）の諸君とは遠慮なく話し合えたので、日頃連絡は手落ちない様にして居た。たた不幸なことは、総選挙という約一か月に亘つて行事が全国的に行われ、内務省全体として、精力がその方へ集中されたことは残念であつた。勿論、反乱側はその手薄の時期をねらつたのは当然であらう。

私は、事件の発生を二十六日の朝五時頃に大臣の直接の

電話を横浜本牧の自宅を受けて知つた。私は平素、横浜から通勤するのが不便なために、後藤大臣が官邸に宿泊しないので、私が代わつて泊まつて居た。これは農林省以来の習慣であつた。これより先、二月十六日、河田内閣書記官長と内閣記者クラブとの間に紛争が生じ、クラブが例の会見ボイコットに出た。私は内務大臣秘書官に過ぎない身分であつたが、クラブの幹事をしていた読売の安藤氏、報知の小松氏と別懇な関係から、何かのキツカケで両者の調停に入る羽目になった。幾晩か徹夜で走り廻つて最後の手打を二十五日夜に行い、その晩、横浜に帰つたのか何としても不覚であつた。

電話を聞いた私は、すぐさま近くのハイヤーを叩き起こして東京へ急行した。京浜国道を信号無視のノンストップで行けと命じたので運転手は怪訝な顔をした。渋谷金王の大倉私邸の付近は平素と何ら変わらない静まり返つた屋敷町で丁度午前六時半であつた。応接間で治子夫人が待つて居られて「文夫は今近くの一宮さんのところへ参つてます」とのことだつた。後藤は一宮房次郎氏とは郷里大分で小学校の時代から親友で常に行き来をして居た。私は宮益坂の電車通り一つ隔てた青山車庫裏の一宮邸に行き、そこで大臣と一宮氏に会つた。「今晩五時すこし前、外から電

話があり治子夫人がでたら大臣は在宅かと言われた。先方の名を聞いたら、自分達は何某陸軍少尉で今、内務大臣官邸に居るが、これから私邸に行くからと言い電話を切った。それから大臣はすぐ警視庁へ電話をした。始めて事件勃発の大体を承知した。

一宮家から大臣は湯浅宮内大臣⁽⁷⁾へ電話して事件の概略を取り敢えず報告した。湯浅宮内大臣は、帝都の治安に全力を尽くし、あらゆる手を打って、民心の動揺を禦ぐように特に内命があった。大臣は、そのため警視庁と連絡をとって緊急の諸手配を總監に命じ、刻々情報を知らせる様指示した。それにしても内務省警保局の幹部が不在のため、必要な手配することが殆ど不可能であったことは誠に不運であった。

午前十時頃、誰れとも告げず私に電話がかかって来た。出たら総理秘書官で総理の甥にあたる稲田耕君であった。非常に辺りを憚る様な気配で「総理は殺されなかった。健在である。今は総理官邸の中に密にかくまって居る。それを大臣に告げてくれ、極秘で万事手配頼む」とほんの一分間の短い時間で聞き返す暇もなく電話は切れた。直ちに大臣に報告すると共に、大臣から更に湯浅宮相に伝えた。当然すぐ私たちに気付いたことは、敵の手中に置かれた総

理の生命の危険をどうして救出するまで守るか、それから救出の手順をどうするか、暫くの間、頭をかかえて黙せざるを得なかった。

兎も角、軍部の反乱は、軍部自らこれを沈静する責任を強く要求することは勿論であるが、内務大臣は自ら一身を投げ出して治安の全責任を自ら陣頭指揮すべきである。敵中に在る総理を如何にして救出するか、これが今の内務大臣の双肩に負わされた緊急の要務であった。しかし一方、他の閣僚は、続々参内して居る。内務大臣も緊急参内することが当然だと言う勧告もあった。

兎に角、もう少し反乱軍の情報を集めなければならない。治安警備の手配は電話で要所要所に一応の緊急手配した。大臣専用の車がないので、近くの広瀬文忠（内務省土木局長）に依頼して、その車を借りるため広瀬家に大臣と行き、そこから青山の日本青年館に向かった。電話指揮と情報入手のため、人目に触れない様、また参内に距離的に近いことが必要であった。そこで田沢義鋪氏とも会って僅かの間話し合い、そこから車で四谷見附を通って半蔵門に向かった。私が車を降りてその衛兵に通行出来るかと聞いたなら、和田倉門の方へ廻⁽⁸⁾って貰いたい、此処は何人も通行出来ないとのことだった。そこから和田倉門を通じて宮内省の庁

舎に入った。午後一時半を過ぎていた。後藤は直ちに湯浅宮相に会い、今迄入手した事件の概要を報告し、直ちに宮相と共に拝謁した。

運の悪い時は仕方ないので、その前日、唐沢も相川も予て京都に召集した全国警察部長会議に出掛け、二十六日事件当日は共に東京不在であった。治安警察の直接の責任者の不在のため、治安の指令や情報の蒐集のために暇取った。参内が遅れた後藤大臣までが後々で批判された。

以上

【別稿 2】 翼賛政治の顛末（手記③）

昭和十七年一月四日、余は旧知の湯沢内務次官々郎に新年の挨拶に立ち寄る。しかるに図らずも同氏より衆議院は昨年四月、議員の任期満了したるも時局重大のため一年延長せられ本年は五年目にて、戦争開始と共に国民の結集を要とするためにも総選挙は避けられぬ実状あり、しかるに昨年、近衛公の提唱により新体制運動起こりその結果近衛内閣の下に大政翼賛会組織せられ、政党組織はいづれも解散し、現在事実上候補者を推薦する母体たるべき政治結社は存在せず選挙を管理する内務省としては当然その責任上何等かの手段を講ぜざるを得ざる立場にあり。この点に就いて湯沢次官より縷々説明あり。戦時下の衆議院選挙に就いて、特に候補者を如何にして推薦すべきかその具体方策確立に就いて意見を求められる。

十六日、湯沢次官を訪ひ、内務省としての方針案を示され、それに伴う推薦具体策を考うるに当つての構想を話し合う。

十八日、候補者推薦方法、その具体案を起草、後藤文夫（翼賛会中央協議会々長）に見せる。

草案の概要

一、一応大政翼賛会を推薦母体とすることが考えられるも今その性格を政治結社に改めることは政府予算の下に組織せられている同会として如何。特に首相が同会総裁を兼ねている関係上、一国一党組織化を強制することとなるからありて不可なり。

一、さりとて四月選挙を目前に控え、殊に戦時下の国内紛争は出来るだけ避けることも考慮に入れば速やかに且つできる限り民意の盛り上がる形に於いて新たに戦時下に相応しき推薦方式を樹てざるを得ず。

一、但し、それがため一応の政府の総選挙に臨む方針を固め、その線に沿って戦時下の国民政治総意の盛上りを企図するに若かず。

右のため政府として次の措置をとること。

イ、政府の今次総選挙に対する決意表明。

ロ、政府は右の措置と共に速かに右の決意を国民の代表的人物（国会、財界、農業界、学界等）に対し総選挙に適当な候補者を推薦するための協力を依頼すること。

ハ、爾後、これ等の代表的人物による候補者推薦の運動を企図する母体を中央に組織し、それを中心として地

方各府県毎に中央に準する支部組織を設置する。地方支部組織は大政翼賛会府県支部の協力を求む。

十九日朝、右草案を湯沢次官に提出。

二十日、横山助成（大政翼賛会事務総長）に会見。以上経過を話し、構想について話し合う。草案は見せず。

二十一日、湯沢次官会見。草案に就いて説明す。次官の希望により、取り敢えず企画グループを設置することを打ち合わせる。夜、後藤文夫と共に伊沢多喜男翁を訪ね、経過と草案の内容を説明す。

二十二日朝、横山氏より至急面会したとの電話あり。

後藤を通じ草案を横山氏に送り、午後、横山、後藤と会い協議す。夕方、湯沢次官会見。横山、後藤との会談の結果、若干の修正案を報告し、第二次案を手交す。

二十三日、湯沢次官会見。草案具体化について、一応、政府の承認を求めることに就いて協議。午後、横山氏の要請により面会。同氏より 一、知事ブロック案 二、指導企画室設置案 等の提案あり。夜、後藤と協議。

二十四日、湯沢次官より草案具体化に就いて政府関係者に説明することを求めらる。午後、院内にて、星野直樹（内閣書記官長）湯沢三千男（内務次官）武藤章（陸軍軍務局長）横山助成（翼賛会事務総長）と会見。右説明。企

画進行に就いては、横山の外、瀧正雄（貴族院議員）と余の三人に任せらることを提案し承認を得（右に就いては予め湯沢次官と相談済）。

大体、以上の計画案を政府も承認し、その一切の準備業務を行掛上、余自ら当らざるを得ざる破目となる。一月四日、偶然湯沢内務次官を年賀に訪い、この任務の渦中に巻き込まれたるは、運命の不思議なり。その後、湯沢次官は東條首相兼務の内相に昇任し、衆議院方面より山崎達之輔、永井柳太郎両氏にその協力を求め、また横山助成氏より太田耕造、遠藤柳作（以上貴族院）を推薦し、余また衆議院より前田米蔵、大麻唯男の参加協力を求め、重要な計画実行に就いては随時論議相談することを得たり。ただ推薦母体の性格に就いて湯沢内相、山崎達之輔、永井柳太郎三氏と協議したる席上、山崎、永井両氏より純然たる政党組織とすべしと云う強硬意見が出、余の意見と対立したり。即ち余が考えは飽くまでこの母体は候補者を推薦する任務の組織にして、その後は当選者の自由意志によって決定すべきものと陳べ、結局、内相の仲裁により当初の計画通り余の意見通り決定せり。また推薦母体の首脳に何人を推すかと云う問題については、最初より種々論議があり人選難ありしが、湯沢内相、横山助成氏と三者会談の折、横山氏

より軍部方面より強く林銑十郎陸軍大將を推薦要望ありとのこと、余は軍人会長は避けたきも政治家、財界人中、差し当たり相応しい人物なく時節柄、軍人已むなしとするなら、横山氏が前首相阿部信行大將なら世間も納得すべしとして、この件は内相より東條首相の諒解も求め、結局阿部氏に決定せり。

また、最初、国会、財界、農業界、学界より代表者を選ぶ場合の顔ぶれに就いては、（一）軍人を成るべく少数に止めること（二）所謂極右翼の人物は避けること（三）学界人を加えること等を進言したるも、ことは内閣自体の所管事項にて阿部信行氏等三十三名に内定したり。

これより先、政府は予ての計画通り二月十八日「衆議院議員総選挙対策翼賛選挙貫徹運動基本要綱」を発表し、二十三日、民間各界代表者三十三名を首相官邸に招き、東條首相より協力方を依頼し、余は議事進行の担当者として列席す。

首相の挨拶後、政府側は全部退席し、阿部信行氏を座長に推し協議の結果、「翼賛議会議体制の確立を期し、これが適切な方途を講せんこと」を申合せ、その具体的方策を大麻唯男氏等十三名を特別委員として指名した。この特別委員会は虎の門霞山会館にて第一回を二十四日、第二回を

二十七日に開き阿部信行氏並びに余が列席して協議す。

この特別委員会の協議の結果は、「全国的に推薦運動を行う中央本部を設け道府県の支部を置く、本部と支部は密接な連絡を保ちつつ候補者の推薦を行う、この本協議会は政治結社の手続を取るも総選挙後解散する」旨を決議した。

かくて総会は第一回を二十八日丸の内糖業会館にて第二回を三月四日丸の内会館にて開き、右特別委員会の決議を前提として推薦運動の基本方針（本部、各道府県支部の機構、推薦方式）等を協議し、殆ど余の手許に於いて予め用意したる各案を決定す。この結果、名称を翼賛政治体制協議会として本部の常任役員として横山助成、遠藤柳作、太田耕造、瀧正雄の四名を幹事とし、事務局総括を余が担当することとなれり。横山氏は余がこの計画の当初よりの相談相手であり、遠藤氏は阿部内閣当時の書記官長にして、瀧氏は近衛公の親近者たる関係上、余が特に推薦し、太田氏は平沼内閣の書記官長たる関係上、湯沢内相から推薦があったものなり。

事務局長として余は、直ちにこの重大な任務を遂行する有力なスタッフを集める事務局組織に着手す。これがため大政翼賛会、農業団体特に帝国農林産業組合、農業報国会

等より臨時出向員を要請し、特に事務一般には選挙肅正連盟本部幹事横山正一氏を、また企画渉外のため市政調査会の田辺定義氏、広報連絡に前報知新聞政治部長岡崎博光氏の三君が余がために献身の協力をし、五十一名の事務局員を動員し得て事務局は東京会館の全館を借入れることにして三月四日には事務局を開設せり。

越えて三月八日、阿部会長より大麻唯男、岡田忠彦、後藤文夫、伍堂卓雄、下村宏、千石興太郎、永井柳太郎、平生飢三郎、藤山愛一郎、山崎達之輔、高橋三吉、末次信正、小磯国昭の十三氏を支部結成委員として選ぶ。三月十八日政治結社の許可を得て正式の設立をなす。同日、予て大政翼賛会各府県支部長によって推挙を依頼したる支部長を委嘱発表し、二十日続いて支部役員全国八百名を委嘱、二十二日には全国支部長を東京に招集し、第一回の支部長会議を開く。出席支部長四十七名中、陸海軍予備将官が十八名を占めた外は政党に属しない名望家、有力者なり。

ここで重要な協議はいかにして候補者を推薦するか、その銓衡の一般基準などに就いて会長より左の如き指示を与えるり。

一、本会に於いて推挙すべき候補者は広く各界に互り国体の本義に徹し人格識見高く部分的利害に捉われることな

く国民の信望を擔うに足るものにして且つ聖戰完遂の爲、翼賛議會確立の旺盛なる熱意と実践力を有すと認むる者の中より厳に情実因縁を排し各選挙区毎に定員数を銓衡す。

二、内申は各選挙区毎に定員数を銓衡するも候補者として適當なるものを得難き場合は事情を具申すべく、又已むを得ざるときは一名を限り加うることを得。

この結果、各支部は三月三十一日直ちに候補者を内定し通告し、本部は中央銓衡委員会に諮り決定することとせり。即ち本部は第一回委員会を三月三十一日朝開き、第二回を二日朝、第三回を四日午後二時より翌五日午前五時半迄徹宵銓衡を行い、四百六十七名推薦候補者を決定す。

この中央銓衡会議にては旧政黨員にして不適當と見られるものに関する論議が主として右翼傾向の委員から強硬に出て阿部会長もその裁定に苦慮せり。

四月三十日、総選挙行わる。選挙の結果は推薦議員三百八十一名、推薦を受けず当選したる所謂非推薦議員は八十五名なり。かくて衆議院議席の八割りを占むる推薦議員の結束について、翼賛政治体制協議会は総選挙後の総会を五月三日開催し、選挙の経過を報告すると共に、種々協議したるが殆ど全員の意向は戦争遂行のためには何らかの組織体として纏まるべきとしたり。かくして政府は東條首相の

名を以て五月七日財界、政界、言論界代表者七十名（余を含む）を首相官邸に招き各界一致の協力を要請す。八日、再び（余を含む）これ等招請者は大東亜会館（東京会館）に集合し、小倉正恒氏を座長として準備会を開き挙国的政治力結果の方途を講ずることとし、座長指名によって特別委員（委員長後藤文夫）三十三名（余を含む）を決定し、具体化について引き続き特別委員会を開き協議し、さらに詳細案を起草するため、山崎達之輔、大麻唯男、清瀬一郎、太田正孝（以上衆議院）滝正雄、横山助成（以上貴族院）橋本清之助（前翼協事務局長）七名の小委員を挙げ、十日小委員会は規約、綱領、宣言について協議す。

この間余はしばしば阿部信行、横山助成、後藤文夫、伊沢多喜男、湯沢三千男、星野直樹、前田米蔵、大麻唯男氏等の間を往復し、各方面の意向の纏め役に奔走す。また規約、綱領の起草もし、特に宣言は慎重を期するため余自ら私に朝日新聞社緒方竹虎氏を訪い、その起草を依頼し、後に非常に名文なりと激賞された宣言文を得たり。

かくして第二回総会を十四日大東亜会館に開き、後藤文夫委員長委員会報告あり、会名を翼賛政治会とすることを決議す。

以上

(1) 手記④「連合国最高司令官に対する請願書」のことであるが、本稿では紹介しない(解説者注)。